

探偵小説第八集
美人狩



特 9

981

095084-000-9

特9-981

美人狩

芙蓉生/著

M26

DBQ-2691



探偵 美人狩 (明治廿六年四月十五日出版)

源氏車の跡へは引かぬ、敏雄が一諾千金の、花を散らさじと追掛たる、甲斐も嵐の夜に紛れ、影を隠せし曲者の、跡に名高き美人幽霊、續いて胸の老幽霊、正体見破る一軒家に、近き岩間を朝鷹の、目には洩らさぬ小雀を、取つて押えて知得たる、虎穴に踏入る狼狽突戦、九死の中に救ひし玉を、再び本へと返返され、無念に飛ばす力足、追込来たる大阪にて、又も手剛き悪者の、放ちし刺客をだしにして、敵を欺く魂膽の、數々盡す舞臺のり者、工みに工む計容の、悪を見事に掻漆、塗を剥がして木地盆の、丸く治めし大團圓、これを隣の御子息に問へば、ア、面白い事と云爾。

美人狩

第一回



時は早一時、空は荒れかゝりて鳴神稻妻の物凄き真夜中過、足柄越の山嶺なる黒岩村の井端に、吉田屋とて旅籠を兼帯の小料理屋にての事主人秀藏は戸締

りを改めて奥の寝間に入り、今しも枕に就かんとせし折から門の戸を割るゝばかりに叩く者あり。其頃此村は殊更に物騒にて、追剽強盗の絶えし日もなく、昨日は向の寺に五人の押込ありて住職の和尙は無残にも斬殺され、今朝は又東の峠にて旅人が裸にされたりとかゝる事の引續きて中々油断のならぬ折なれば、若しやそれかと秀藏は胸を騒がせ、やゝ暫くは躊躇ふて居たりしが、かくては果てじと漸く氣を取直し、用

芙蓉生譯

緒言

立、新奇にして能く人の意表に出で、讀者をして慄然、惘然、愕然、呆然、身其境に在りて、心其局に迷ふが如くならしむるは探偵小説に如くものなし。方今感情的小説の流行太甚だしく事實的小説全く形を缺めてより世間人心を活殺する處の奇蹟に満するや久し。此書は専ら遺骸の需要に供せむが爲に特に脚色の奇絶妙絶拍案三嘆に堪ふべきものを採撰し平易の文章を以て自在に亂麻の活劇を描き去り、毎號一卷讀切として、懸念、瀟船、瀟車、馬車中の好同伴たらんことを期す。去れば其價は及ばむ限り最低額となし、以て讀過一番の後には途上に棄却して些の遺憾なからしめむとす。

毎月二回發行

一册定價金七錢十册前金六十五錢、郵稅各四錢郵券代用一割増

發行者

東京日本橋區通四丁目五番地 和田篤太郎

印刷者

東京日本橋區通四丁目五番地 小松角太郎

電話番號

東京日本橋區通四丁目角 發行所 春陽堂

心棒を取出して片手に提げ、手燭を左にかざしながら店口へと近づき、秀誰だぞと高く呼ばれば、開けて呉れと叫ぶは鐘を帯びたるどす聲なり。

秀誰だ名を開かない内は明けられないさういふ聲は秀歳さんちやアねえか。今此處へ女伴の旦那をお連れ申して来たのだ。身元はたしかなお客様だよ。文句をいはずに早く開けて呉んねえ。秀お前は誰だ。聞かない聲だが名は何といふのだ。己ア勝ッていふ車夫だ。お前さんも知ッてる坂の下の初音屋の挽子だ。安心して開けなせえ。

初音屋とは此山の麓なる名高き車屋、勝といふ名も三四度耳に入れし事のあるに、秀歳は少し心をゆるして戸の棧に手をかけながら、秀勝といふのは嘗か聞いた事がある名前だが、嘘をつくと只は置かないぞ。嘘か真箇か戸を開けて此面を見なせえ。世間に二つと無え頼のたん癒が何よりの證據だ。

折しも雨は颯と降り來りて、雲間にひらめく電光と共に頭上を鳴渡る雷は今にも落ちなんばかりなるに、あれッと呼ぶは確に女の聲間違はなしと秀歳は漸く戸を開く途端、雨風はどツと吹込みて手燭は打消され、同時に表の三人はどやくと駈

込みて手早く後の戸を引閉てたり。

何者と未だ心に危みながら、秀歳は再び火を點して屹と前面を見れば、土間の真中に丈高く立派なる男一人、年若き女の手を引いて突立ち居たり。

男の年頃は三十七八、顔の半ばは髷に蔽はれ、衣裳美々しく何處から見ても身分よき紳士なり。女は又世にも希なる美人、秀歳は見惚れて茫然たるばかりなりしが、急に揉手して腰を卑くし、秀貴客方とは存じませんで誠に御無禮を致しました。最早夜更でも御座りますし、それに近頃はまことに物騒で御座りますので、つい用心を致しまして、早くお開け申しませんでまことに相済みません。寄いや時が時だから無理もない事だ。此方こそ折角腰かけた處を起して氣の毒であつた。秀何う仕りまして、只今お部屋のお支度を致します。暫く何うぞ此室へ。と店に續きたる廣間へ通し、女中頭のお島を呼立て、彼此と用意を急がせたり。程なく表は大嵐となりて、山も崩れんばかりの暴風雨、流石の秀歳も此地に住んでより以來嘗て覚えざる荒なりと驚きつゝ、尙も客の様子を見て居たるに紳士と乙女とは内に入りてより未だ一語をも交さず、乙女はきよろ／＼四邊を見廻はし、又紳士の方を見返りて物に恐

る、如き風情なり秀藏は先程戸を叩かれし前に聞つけし怪訝しき物音といひ今又二人の間の怪しむべき素振といひかた／＼何か様子ありげなりと思ひながら無言の席の照を繕はんとて乙女に打向ひ、秀何うもひどい嵐でござります。途中で逢ひなざりませんで誠に仕合でござりました。と云へども何の答もなく、只僅かに點頭きたるのみ。島は其時入来りて、支度の整ひたる由を告げて先に立つて案内するを、乙女は急がはしく呼止め、乙女は別々にして呉れたらうね。島いゝえお部屋も一つに、お床も一つに致しました。乙女は身裸して乙女は別の間へ兼かして貰ひたい何うぞ離れた間へ案内して呉れといひながら恐る／＼連の顔を見上ぐるに、神ナニ秀子心配するには及ばん彼女は己等を夫婦と思違へたのだらう。ハ、ハ、ハ、と事もなげに笑ふを乙女は甚しく嫌ふ如く横を向さしが、更に秀藏に打向ひ、乙女ノ誰ぞ私の部屋へ来て働をして呉れる女は居ないか私の胸で寝て貰ひたいが、秀藏も仔細あるべしと心に點頭きて、秀へいお望ならばお島をお傍に寝かしましたしやう汚穢らしいのをお厭ひなくば構はずお連れ下さい。乙女は左様いふ事にして貰つて私は直に行きまじやう。とやがて乙女はお島

に導かれて此場を去り暫くして紳士も案内に連れて別間へと通されたり。跡に秀藏は車夫に向ひ、秀オイ勝今連れて来た客は何者だ。勝何だか己もよく知らぬえ。先程あの髷むちやの旦那が大急でやつて来て、直に山の秀藏の宿まで乗せて行けといふので、己ア大もがきて挽いて来たのだ。秀それぢやアあの客は己の名を知つて居るのか。勝そうと見える、だがあの二人は様子が怪訝しいぜ。何でも己の鑑定ぢやア彼女の進まないのを無理に連れて来たらしい。秀何うしてさういふ鑑定をつけた。勝ナニ此方へ挽いて来る途中で二人の話の様子を少し聞かされた。よ、そればかりぢやアねえ。山を登つて来る間も彼女はしく／＼泣いて居た。秀ふむ、何でも彼客は怪しい奴だわえ。勝時に最う餘ッ程遅いし、それに此嵐ぢや歸られぬえ。から己も泊めて呉んねえ。秀うむ宜し。車は何うした。勝軒の下へ引入れて置いた。秀小屋の方へ片附けるが、いゝ。とそれより手傳ふて車を片附け、やがて勝を乙女の伏したる部屋に近き一間に伴ひ、戸口／＼のしまりを再びよく調べて、秀藏は漸く枕に就きたり。されど何とせしか容易に眠られず、寐苦しきまゝに彼客につきて種々想像を浮ぶ

折しも、突然キヤツと叫ぶ聲の續けて耳に入りしに驚きて床の上に跳起き、耳引立つれど外に何も聞えず。さては空耳なるべしと思定めたれど、それにしても何となく心安まらず、遂に床を出で、手燭を點し、靜かに部屋毎を見廻りに行きたり。雨は早收まりて星影まばらに戸の隙を洩れ、下へと落つる溪河の流れの外は萬物寂として何の響もなく、廊下へ立出で、四方を能く見れども少しの異状もなし。秀何の事だ。大方氣の故だらうと臥床に歸り、安心してかぐツすり熟睡したり。翌日目を覺ましたる折は、日の影は早障子を一杯に照らしかけし頃、秀藏は床の上にて起直りしが、家内は恰も一人人居らぬ如く靜まり返りたるに驚きたり。平常は臺所の物音も島の罵る聲などの聲高に聞ゆるが例なるに、今日は何事かありしかと急ぎ寐衣を着替へ、室の外に走出でしに、最初に出遇ひたるは爲吉といふ下男。且那今朝は一睡何うしたのです。秀何うしたとは何だ。爲吉は第一彼處に見掛けない車があります。誰が挽いて來たのか誰が乗つて來たのか主が知れないのは怪訝しいぢやアありませんか。秀ありア坂の下の初音屋の車だ。引いて來た男は昨夜遅く客を送込んで來て下の部屋へ泊つたが、大方疲れて寐過して居るのだらう。爲吉

ればかりぢやアありません。島どんは今朝はどうしたのか見へませんし、臺所の婢達は一ツ所にかたまつて昨夜恐ろしいものにも出會はしたやうな風で皆ぶるく、慄へて居ますぜ。秀藏は急ぎ臺所へ行きて見れば、爲吉が云ひしに違はず、婢共は一ツ所に小さくなりて身を縮めて居たり。秀手前達は何うしたのだ。何故朝の支度もしないで、其様に慄へて居るのだ。島は何所に居る。婢も島どんは今朝は未だ顔を出しません。何でも昨夜は恐ろしい事があつたに違ひありません。秀そりやア何ういふ譯だ。婢昨夜夜中に私も此處に居る兼も、何だか恐ろしい聲が聞えたので叱驚して目を覺し、すど女の聲でキヤツといふのが又聞えました。それから今朝見ると島どんの床は明空で、何處へ行つたか皆くれ姿が見へません。秀藏は今更に又驚き初めたり。さては昨夜の叫聲は眞實なりしか。何は兎もあれ島影を見せぬが不思議の至りと、店の方へ引返せば、其處には近所の得意客が幾人か早詰掛け居たり。秀さん、今朝はお前ん處は何うしたのだ。秀何うしたのか私にも分らない。昨夜嵐の時分に客が來たといふぢやアないか。秀さうさ。處がまだ

起きて来ないのだ。これから行つて何うしたのか見て来やうと思つて居る處さ。と云
捨て、彼の女客とお島が伏したる部屋の前に至り、遠く耳を寄せて様子を窺ひ
しが、中は静まり返りて少しの物音もなし。若しお島が寝忘れて居るものとせば、い
つもの大尉が聞えねばならぬ筈なり。若し又目を覺まして居るならば僅なりとも
人の動く氣勢のあるべきに、かく何の音もせぬはと胸を轟かしながら、聲を掛けて
見たれど返事もなし。更に外より打叩きて又聲を掛けたれど何の答もなし。秀藏は
此にて大に驚き、此度は彼紳士の寐たる部屋の前に行きて、先の如く音訪れたれど
同じく返事もなく、中はしんとしてさながら人なきが如し。秀藏は此處に至りて全
く變事のありし事を確め、急ぎて車夫を導きたる室に赴き、今度は案内もなく戸を
引明けて見れば、こはそも如何に數時間前に己が導きて此室に寝かせし勝三は、敢
なき死骸となりて臥床の前に殺されて居たり。

第二回

秀藏は吐く息も絶えくゞに色蒼めて店口へ走り返れば、居合す人々は見るより驚

きて一齊に何うしたのだ。何事が起つたのだ。秀藏は急に返事も出来ず、片隅に備へ
ありし樽より急ぎ一杯の酒を汲出し、一吐に飲干して漸く胸を撫下しながら、秀藏
の家で人殺しをしたものがある。客何時何處で々々誰が殺されたのだ。秀藏は私
の跡へついて来て見なさいと先に立ちて招くに、人々は氣遣はしげに我先にと、從
ふて行けば秀藏は先づ車夫が横死せる室に至り、それと指さして振返るに、皆々
阿ど驚きて目をそばだて、皆殺した奴は何處の奴だ。殺された男は何者だ。秀藏それよ
りまあ此方へ来て見なさいと彼の鬚深の紳士の室に導き、秀藏が開けて見て呉れ
ぬかと各自の顔を見るに、皆々尻込して容易に襖に手を掛けず、中に一人漸く進出
で、慄へながら頻と引開けたり。人々は又も恐ろしき景状を見るならんと豫想け
しに、案内にも室内は少しも取亂したる跡もなく、然も人の影だも見へず、秀藏は居
なくなつたのか。ちやア若い女の方へ行つて見やう。ア、罪人はどうく逃げて仕
舞つた。秀藏は罪人とは何者だ。秀藏は私には知らない。甲それでも今逃げたと云つた
ではないか。秀藏は左様さ。此室に居ないから逃げたと云つたのだ。乙それは誰の事だ。秀
昨夜来た鬚の濃い目附の悪い客の事だ。丙其若い女は何處に居るのだ。秀藏は此方へ來

て見なさい。彼の美しき乙女の室へ連れ行き、此處だと恐ろしげに前に立止りたり。一人又進み出で、襖を引開けんとせしが、中より栓でもかいか容易に開かれず、四人ばかり力を合はせて漸く開放し、入込まんとせしが中を見るより、悴として身を退きたり。あゝこれ何等の惨状ぞ、憫むべき島は最期の苦悶の機を手足に残して、空しき屍を疊の上に横へ居たり。秀藏は慄へたる聲にて、秀其方の寝床を見て呉れとあるに、人々は云はれたる方に目を注げば、夜具は覆返りて枕はけし飛びて居たるのみ、中は装束の売にて人もなし。秀、あの美しい娘は何處に居る、其處等に死骸はないか、甲此處には島ばかりだ、外には何も無い。一人は又秀藏に近づき、一躰何うして此様な事になつたのだ、譯を話して聞かすが、いゝ、再さうだ、詳しく話して呉れる。秀藏は求に應じて昨夜よりの始末を落もなく物語れば、人々は口交もせず耳を澄まして打聞たり。丁、それぢやア其美しい娘は何うしたらう。秀、此處に居なければ大方我家の近所に殺されて居るだらう。乙、成程さうかも知れない。これから其處等を探がして見やう。と皆々打連れて店口に歸り、それより手分して探がしに出んとする折しも、遙に蹄の音聞えて、只見れば馬に鞭うつて此方へと急ぎ來

る人あり。
 乗手も達者馬も逸物らしけれども、昨夜の嵐の中を突切つて長途を駈來りしと見へ、鞍より上も下も泥に塗れて物凄まじき有様近づくまゝに能く見れば、年はまだ若く眉目秀麗の男、其中に自ら威嚴を保ちて、而も鋭敏らしき顔立なり。やがて家の前にて驢りと馬より飛下り、何の取贖もなく人々の群居る傍へ進寄り、此家の御亭主は何處に居ます。といふに秀藏は羞出で、秀私が亭主でござります。客オ、お前さんか、早速ながら聞きたいが、昨夜此處へ泊つた客があるだらう。秀、へいと秀藏は躊躇ひながら秀、ござりました。客、髯の濃い男と美しい女とが來た筈だが、秀、御意の通りでござります。すばらしい美しい御婦人でした。貴君の御親類でございますか。客は此間に答もせず、せき込みたる調子にて、客、其二人はまだ此處の家に居るのか。秀、處が大變な事が起りました。客、エッ、何事が起つた。秀、人殺しがありました。聞くより客は目を据えて、暫く聲をも發せざりしが、客、彼の女は生きて居るだらうな。秀、何うですか存じません。ト、それより夜來の顛末を物語れば、客は耳引立て、聞居たりしが、話の畢るを待ちて、客、それぢやア女の行方を探がして見たのか。秀、否、未だ出

掛けません、今探がしに行かうと思つて居た處です。客そんなら私にも手傳はして呉れないか。秀何卒願ひます。今は誰にでも手助をして貰ひたい時です。客兎も角其車夫と女中が殺された部屋へ連れて行つて見せて呉れぬか。

請に應じて秀藏は客を連立ちて犯罪の場所へ赴きたり。途すがら廊下にて再び、秀藏の美しい御婦人は貴郎の御親戚でござりますか。客否、ト云ひながら振り返り、客アノ郡長へは最う届を爲たらうね。秀オ、まだ爲ません、すつかり忘れて居ました。客そんなら一時も早くするがよい、それでないとつまらない迷惑をする事があるぜ。

「迷惑を」客さうさ、今店に居る人達は、お前が若し手を下したのではないかと疑つて居る。ト早くも店口の人々の心中を洞察したる如く云放つにぞ、秀藏はハット驚きて立止まりしが、成程或は疑はるゝかも知れずと思へば急に身の毛いよ立ち直ぐさま急ぎ引返さんとするに、客オツト待つた部屋を敷へて行つてくれ。秀彼處に見える部屋がさうです。客よし分かつた處でもう一言云つて置く事がある。假令疑を受けても決して心配するには及ばない。私はお前の罪の無いのを知つて居る。だから充分安心して居るがよい。秀貴郎の名は何と仰有る。一躰何をなさる方です。客

「私は松井敏雄といふものだ。借にお前の後楯になつて上げる。トさながら我が有力を信じたるかの如くいふに、秀藏も流石に意地あれば、秀私も随分友達を持つて居ます。貴郎の手を借りるには及びますまい。身に暗い覺えがなければ少しも恐い事はありません。敏ハ、ハ、さう一概に云つて仕舞はないがよい。いまに私が入用になる時が来るから。」

其言葉をよくも聞かず秀藏は立別れて店先に歸れば、人殺しの噂は早くも廣まりしと見え、大勢の人々集來てがや／＼とよめき居たり。秀私ア郡長さん處へ知らせるのをすつかり忘れて居たが、誰か頼まれて行つて呉れないか。甲モウ先刻知らせに行つた。秀それはよく行つて呉れた。私は顛倒して仕舞つて今迄氣が付かなかつた。乙、オイ秀さん、村役人が來たらお前すつかり云開をして身の証明を立てなくつちやいけなげ。お前の家で斯ういふ事があるのは、これで恰度二度目だぜ。

かかる時には疑念の容易くふりかゝるものなり。特に前後の模糊として捉へ處のなき事實なれば、それと疑はれては随分信じかねぬ場合と、秀藏は心中十分に恐を抱きながら、秀然し誰も私に疑をかける人はありはしません。ト云ひながら人々を見

廻はしたりされども誰一人然りと答ふるものもなく皆々怪しげに顔を見合せて口を嚙みぬ。秀藏はこゝに於て多數の人が我に疑を抱くを知り、敏雄の言葉の逸早くも廻り来りしに驚き日頃の誼交にかへて信用の薄きを恨めども甲斐なく、何はともあれ差當りこの處置を何とせんかと腕を組んで稍暫く途方に暮れたり。これより先奇を好む人々はそれ／＼手分して彼の美人の死骸の有無を尋ねにど出掛けしが、處々を隈なく探終りし後、吉田屋より一町ばかり隔て、山瀬川と呼ぶ淡河の岸邊に來りし時端なく驚くべきものを發見したり。それは生茂りたる草の中に女の羽織の處々引ちぎれたるが横はり、其羽織より少し離れたる處に、一房の髪が恰もむしり取りし如くに捨てあり、近くの草は左右に打伏して、正しく人を引ずり来りしと見え、水際まで判然其跡を残したり。人々は此等を見るより直に岸に添ふて遠く尋行ししが、其外に何の品をも見出し得ざりし疑もなく乙女は此處にて殺され、死骸は川に投込まれしに、激流の事なれば早くも遙なる下手へ押流されしなるべしと、人々は推測りて最早搜索を止め、證據の品々を持參して吉田屋へ引返せり。此時噂は既に八方に擴まりて、見物の群集は店口に黒山を築きしが、此

品々を見るより又一層喧しさを加へ、衆評取／＼に騒がしきといはん方なし。然るに誰云ふとなく、犯罪者は秀藏なりとの事皆々の口の上に上りぬ。始の程は憚る如く打潜みて、隔合ひしが、中には判然それと確むるものも出來り、攻撃の聲は次第に高く、果は口汚なく罵叫べり。甲太い奴だ、乙白ばつくて居やがる。丙、ずう／＼しい野郎だ。丁、平常からして良くない奴だ。戊、取捕へる。己、逃すな。庚、ふん縛れ。申、殺して仕舞へ。手打殺せ。癸、實卷にしる。實卷々々との聲は四方に起れり。かゝる山村のもので、無智の頑民の數多く、激昂せる若者等は、矢庭に寄つてたかつて秀藏を捕へしきりに無罪を言争ふを耳にもかけず、手取り足取り押付けて、今しも残酷なる刑を行はんとせし折しも、突然後に聲鋭く、待つた待つた、暫く待つた。若者等は思はず手を弛めて一齊に振返れば、群集を押分けて現出でたる松井敏雄、秀藏の前に立塞りて再び人々を制するに、若者の中に頭立ちたる一人は肩を怒らして進出で、若者前さんは何故止めなさん。敏雄前達は罪の無い人を殺さうとして居る。まあ氣を落付けてとツくり考へて見るが、いゝ若者の無いとは何を基礎にして云なさんんだ。敏雄は何もあれ決して手荒な事をしてはならん。罪を正すには法

律といふものがあつた。秀藏が眞に罪があるものならば役人に引渡すがいい。かゝる時折よくも分別ある村の元老共が此場に来合せ、いづれも敏雄の言葉に同じて共々若者を押宥めしかば、秀藏は漸く資巻の難を免がれて、公明なる裁判に任せて罪を決する事となり、此場は一先事故なく治まりたり。

其夜の事敏雄は不思議にも何處ともなく影を隠せり。跡にてそれと心附きし人々は、大に怪しみて、甲彼の人は何者だらう。乙一、跡何處から来たのだ。丙、何處へ行つちまつたんだらう。丁、全躰何しに來たのだらう。誰一人もこれを知るものなし。彼は如何なる人なるや、又何地へ向つて行きしか。

第三回

其後秀藏は冤罪を受けて暫く囹圄の中に繋がれしが、彼の松井敏雄は突然又現れて其筋へ出頭し、一々證據をあげて無實の廉を陳述せしかば、程なく釋されて自由の身となれり。それより暫くの間彼の殺人の事は、毎日に噂されしが、一月ばかり経ちて又耳新しく不思議なる事起れり。

一夜此村の平作といへる男が、吉田屋の店に更闌るまで飲んで居たりしが、時刻も遅くなりしとて、飲仲間、別れ我家をさして、踏限として立出でつゝ、彼の山瀬川の橋の袂に差懸りし途端、何處よりともなく突然目の前に思掛けぬ美しき女一人、夜目にも目立つ白き衣裳着て、丈の黒髪を振亂したるが、すつくと立現れて行手に塞がりたり。

平作は酒の酔も直ちに醒果て、ソツとして思はず立止まりしが、恐わくながら眼晴を定めて能く見れば、女は次第に後へと退がりしが、忽然闇の中に姿は消失せたり。

平作は最早一步も進み得ず、齒の根も合はず、栗上りて、這はぬばかりに跡へと引返し、顔を土氣色にして吉田屋へ飛込めば、居合はしたる者共は驚きて、甲、何うしたのだ。乙、何が持上がったのだ。丙、一齊に問掛ければ、平、今彼處で……丁、平作は指さしするのみ聲も續かず。平、水を呉れ、水を一杯。

一人が心得て與ふる水を、未だ喋ふ口に飲下して、平作は漸く息をつき、平、ア、恐かつた。今あの橋の前で幽霊に出會はした。甲、何だと幽霊に出會はした。馬鹿をいへ、

今時そんなものが有るものか。お前は何うかして居るぜ。平何うもしやアしない。確かだよ。確かに幽霊に會つた。然も美しい女の幽霊だ。之は眞實にか、かついぢやアいけぬ。えせ。平己が何で嘘をつくものか。ソレ先達彼處で殺されたといふ噂の女があつたらう。彼の女の幽霊に遊ひない。甲ハ、ハ、眞面目になつて聞いて居やがらア。乙彼奴に構うな。己に話して聞かせろ。平お前は頼もしい。まあ聞いて呉れ。知つてる通り先刻此家を出てよ。山瀬橋の傍へ來るとお前不意に川の中から女がヌツと出で來たぢやないか。眞白な衣服を着て髪を首から肩へ掛けて長く垂らして居たが、此様な鹽梅の手付をして己を招くんだ。ト甲の言葉に激してか事實を大げさに物語れば、乙其處でお前は何うした。直に逃げて歸つたのだらう。憶病な男だ。甲ナ、ニそんな弱いんぢやアない。一番生捕にして呉れやうと思つていきなり飛掛つた。するとお前己の手がまだ届かない中に烟のやうに消えて失くなつた。さうなつて見るとなんぼ己だつて急に恐氣が立つて、何んな目に遇ふかと思つて急いで此方へ引返して來たのよ。甲嘘だ。平作、お前は膽ツ玉が小さいから氣のせいだ。其様なものが見へたのだ。ちツと己を見習つて度胸を大きく持て。平そんな事を云ふな。

らお前今ツから一人で行くつて、見事橋を渡つて見せるか。甲へらぼうめ、渡れなくツて。平よしそんなら賭をしやう。甲何でもしやう。

一座の人々こは面白しとて酒一升を賭けて甲は遂に行く事となれり。甲の名は健助とて日頃強がりの男。證據には橋向に在るものを何か一つ持參すべしと力癩を張りつゝ、勇ましく外へ立出でたり。

夜は早更渡りて四邊は関として音もなく、彼の山瀬川の流のみ岩に激して物凄く聞ゆ。健助は癩の廣言にも似ず、顔は次第に色を失ひて手足は著しく慄へぬ。振り返りて吉田屋の方を見れば、人々は態と表の戸を締切り、店の燈を打消して何れか退きけん。静まり返りて音も立てず、健助はいよく胸を轟かして思はず橋の方を見詰めしが、肌身離さゝりし短銃を取出して右の手に握り、額に汗を流しながら辛うじて進行けり。

漸く覺束なくも橋に到着し、こわく中程まで歩來りしが、何も出ざるに少しく勢付き、心を勵まして行かんとする折しも、忽然として白衣の美人一人、平作の話の如く黒髪を長く垂れたるが、闇の中より此方を指して近き來れり。健作は悸として歩

を止めしが短銃は取なく手より落ちて足元に發火し同時にキヤツと一聲叫んだ
 るまゝ、ばつたり倒れて息絶えたり。
 吉田屋の人々は今や通しと待受けしに短銃の音と共に魂切る如き聲を聞くより、
 只事ならじと各自得物をちつ取つて駈付け見るに健助は死したる如く手足を踏
 伸ばして横はれるに驚き急ぎ肩にかけて取敢えず吉田屋に立戻り種々手を盡し
 て介抱せしかば漸くにして息を吹返せしが心を落付けて頓末を物語るに至りし
 は猶數十分後の事なり。

此の事件は早くも四方に喧傳され山瀬川の幽靈とて村中の評判となり奇を好む
 人々はわざ／＼來りて試せしに何れも平作健助と同じ事に遭遇せしにぞ、いよいよ
 寒なりとて今は誰一人知らぬものなきに至りしが同時に又もや不思議なる事
 起れり。

其頃山瀬川に近く住める者共は晝となく夜となく怪しき老人の徘徊するに遇へ
 り何者なるやは誰も知らず何處に住むものかそれとも知らず老人はいつも河岸を
 傳ふて何をか其邊に失ひたるを捜がすものゝ如く彼地此地に目を配りて上流下

流を隈なくあさり歩めりかくて日毎に此老人の姿は數十人の目に見ゆれど不思
 議なるは誰一人も彼に近づくことを得ず彼はいつも人々より遠く隔たりたる處
 に現れたり一日村の若者の一人が此怪しき老人に話仕掛けて見んとて勇を鼓し
 て傍へと進行きしに老人は踵を廻らして彼方へと歩去り忽ち傍への森の中に隠
 れたり若者は後を逐ふて同じく森の中へ駈込みしに怪しむべし最早其姿は見え
 ず驚きながら尙深く入りて探求めしに端なく若き狩裝束の紳士に行遇ひたれば、
 若者は直ちに今しがた此森へ入りし老人を見掛けざりしやと問ひしに紳士は何
 をも見ずと答へたり森はもとより木立も繁からず紳士が老人を見ざる筈はなし
 ど若者は大に訝りて始終を話せば紳士も又大に怪しみそれより二人力を合せて
 八方を捜ねしが影も見えず形も見えず足跡の一端も發見する事能はざりき。
 若者は立歸りてこれを人々に物語りしに其中の一人も前日彼の老人に行遇ひし
 が同じく不思議に影を隠せりと云出でたりさては幽靈か妖物かど一同の耳目を
 引起せしが數日を経て又も同じ報知を齎らす者ありしに怪しさの餘り事を好む
 若者共は何とかして老人の正躰を見届けんものと八人ばかり心を合はせて八方

より彼の傍に近づき、何處へも逃道のなきやうにして首尾よく取押えんものと企て、或日の事山瀬川へと立出で、暫く河邊を尋歩きしに遙に老人の立居たる姿を見付けしかば、それと各手を分ちて竊に四方より取巻き足音を忍びて次第々々に近づきたり。

此度は決して取逃すまじと注意に注意を加へて進みしに不思議や忽然として老人の姿は消失せたり。人々は猶豫せず駈寄りて見れば、近き岸に一人の女が衣服の洗濯して居たるのみ、外には更に人らしきものも無し。人々は急がはしく彼の女に向ひ、此處にて老人を見ざりしやと問掛ければ、女は彼の老人の立居たる處を指さして、先程其處にて姿を見たりしに、いつの間にか影も無くなりたれば、さては目の迷ひと思捨てたりと答ふるに、人々はアツクに取られて稍暫く茫然たり。かくまで用意して近づき來りしに、人間ならぬ以上は外に逃がるべき道もなし、疑もなく魔物と俄に慄毛をふるつて立歸れり。

いよ／＼出で、愈不思議なるに、噂は益々高くなりて一里先の町まで聞えしが、其處なる一團の人は新聞の探訪探偵などと共に、實驗の爲にとて態々此村へ來たり

しが、例の如く老人は河邊に現れ出でたるに、此度は大勢なれば十分に用意し、三重に取圍みて近づきしに、今數歩にて其場に到着せんとする途端、老人は又もや怪しく影を隠したり。次で探究に來たりし者も、同じく姿を見失ひて空しく立歸りぬ。不思議の聲はいよ／＼高く、或者はこれを幽霊とし、事情を知らざるものは虚談として取合はざりしが、實地に臨みて初めて大に驚き、果は誰一人争ふものもなくなりたり。

かくて山瀬川には二つの幽霊現はれ、其後長く影を絶たず、人々は彼の老人を爺幽霊と呼び、前の白衣美人を娘幽霊と云ひ、噂は一日も休む折もなかりしが、一夜吉田屋にて若者共集まり、酒酌交はして例の幽霊話を續けたる折しも、出立異様なる老人一人、不意に戸を開けて中に入來れり。此人は何者ぞ。

第四回

料らず夜中に怪しげなる老人の入來りしに、前よりの噂に或は彼の幽霊ならずやと、若者等は愕として逃出さんばかりに驚きたり。秀藏は畏場より出で、來意を問

ひしに老人は奥州訛の言葉にて宿を頼みたき山を云ひやがて導かれて一室へ通りしが暫くして再び店へ立出で若者等が團欒する席近く座をしめて秀藏に向ふて四方山の物語を仕掛けしが時々若者の方を振り返りて折もあらば話を試みんとする風情なるに人々は皆薄気味悪く若かず彼の爺幽霊を熟知せる人を呼寄せ此老人がそれか有らぬかを見せしむべしとて屢かの幽霊に出會ひたる卯平といふ男の方へ竊に使を馳せ急ぎ呼迎へて鑑定をさせしに卯平は一見するより彼の幽霊に非ずと断言せしかば人々は漸く安心して又々盃を取上げ種々の雑談に時を移せしがいつしか又も幽霊の噂となりしにかの奥州の客は耳を傾けて聞いて居たりしが態どらしく打笑ひつゝ(譯者申す此老人の話は奥州言葉なる可き筈なれ皆然り其心して讀みたまへ)奥お前さん方は幽霊の話をして出だが其様なののが有る譯のもんぢやアない屹度何かの間違でしやう若間違處ぢやアありません確かな話です奥ハハハ、私には嘘どしか思へない若論より證據は今でも幽霊が出るから仕方がありませんしかも橋へ出る幽霊の方には此處に居る者の中で幾人も見たものがあります奥お前さん方の目は何うかして居る若そんな事を云

ひなさるなら今ッから行つて直其處の橋を渡つて御覽なさるがい、私の云ふ事が嘘でないのは直に分かる奥面白い行つて見ましやう行つて橋の上を二三度往復して見ましやう處で其幽霊といふのは男ですか女ですか若まだ若い美しい女です若き美しき女と聞きて老人は驚きたる素振をせしが人々はそれとも心附かざりし奥其處で少し様子を聞申したいが幽霊を見たといふのは何誰です平作は此場に居合せたるが直ちに進出で、平私が見ました奥何日頃平一月ばかり前に奥其時の模様を話して下さらんかこれから橋へ行つて萬一にも其幽霊に出會つた時お前さんのと同じものだか何うだかを心得て置きたいから平作は娘幽霊の影を見るより直に逃戻りし男なれども想像のまゝ尾鱗をつけて始終を物語れば奥州の客は口交もせず聞居たりしが奥それぢやアこれから行つて其美しい娘にお目に掛からう若お前さん一人で行かなくつてはいけません娘幽霊は二人以上の時には決して出て来ません奥宜しい一人で行きましやうト表の方へと立出でしが振り返りて奥橋へ行く道は何方です若者の一人は直ちに道を教ゆれば老人は少しの用意もせず何の恐氣もなく落付

拂つて立出でたり。山瀬橋は一町ばかり先に在りて、其間には何も無く此處よりよく見え渡れば、人々は傍の窓より竊かに老人の舉動を見て居たりしに、彼は静かに進寄りて橋に至り、往つ戻りつ五六度其上を徘徊して後稍暫し欄干に凭れて佇みしが、静かに踵を廻らして歸來れり。奥の前さんは嘘をついたね、暫く橋の上に立つて居たけれども何にも出やしない。若今夜は何うかして出て来ないので、嘘と思ふなら二三日此處に逗留して試して御覽なさい。老人は打笑ふて信とせざる風情なりしが、やがて秀藏が差出す宿帳に平田敬次といふ己が名を書記し、人々に別れて我が部屋へと退きたり。

されど彼は寐床にも入らず、腕を組みて何をか考へ初めしが暫くして獨言くやう、敢確かに幽霊を見たとは驚くべき事だ。若しやあれの事ではないか。最う少し以前に此噂を聞けばよかつたに、残念ながら遅かつた。何うかして一度でも其幽霊に遇つて十分様子を見極めたいものだ。……怪しむべし。此時の言葉には少しの奥州訛もなく、徹頭徹尾純然たる東京言葉なり。聲も又俄かに若返りて、前の如き皺枯れたる音は微塵もなく、慥かに姿をかえて此家に入込みし人と覺ゆるが、又もや腕

組して思案に暮れ、家の者共が寐靜まる時刻を待ちて竊と立上りて山瀬橋の方に向ひたる窓際に差寄り、音せぬやうに戸を押明けて、ちつと橋の邊を打眺めたり。窓は見晴しよき處にありて、晝ならば數十町先も一目に見盡すべき場所、敬次は其處に半時ばかり寄掛りて居たりしが、俄にハッと驚きて屹と前面に目を注ぎたり。嬉しや望み居たる娘、幽霊は、今しも橋の上に忽然と姿を現はしぬ。

第五回

敬次はかくと見るより少しも猶豫せず、直ちに立つて携來れる草籠を打開き、中より細長く壘みたる細梯子を取出し、急ぎ引延ばして、鉤の端を窓に引掛け、他の端を地上に投下ろして、身輕に繩の上を傳ふて早くも下に降立ち、足音を盗みて竊に幽霊の方へと近付きしが、橋際近く來掛かりし折しも、幽霊は音も立てず静かに跡へと退行けり。敬次は如何にもして近づかんものと氣をあせりて歩を進むれば、敬次が愈進むに連れて、幽霊は愈退き、橋を渡りて左へと折曲り、川に添ふて静かに退去るに、敬次は足を早めて急に追掛くれば、幽霊も又逸早く先へと行けり。若し我立止

まらば彼も又立止まらんかと試にはたと歩を止めしに、幽霊は猶も問の中へと退くにぞ見失ふてはならじと敬次は一倍急ぎ足になりて馳寄りしに不思議や恰も揺消す如く姿は何處ともなく見えずなれり。敬次は飛ぶが如く消失せたりし場所に来りて隈なく八方を睨みて立居たりしが、やがて懐より目印の棒を取出し、其處へ確と土深く打込みて暫くして吉田屋へと立戻り、細梯子を傳ひて部屋に入りつゝ、繩を取納めて戸をもとの如くし、直に臥床に入りて睡みたり。

翌朝食事を終ると其まゝ、敬次は散歩に出づる躰を装ひて吉田屋を立出でしが、脇目もふらず直に橋へと急ぎ、それより彼の幽霊を追掛けたる道に添ふて、綿密なる詮索をなしつゝ、辿行き、目印の棒を打込みたる處に至りて、最も綿密なる詮索を遂げたり。其間敬次はしきりに點頭きて、何か胸に思當る如き様子なりしが、暫く時を費して宿に立歸り再び革籠を開きて一包の品物を取り出し、中をよく改めて本に納め、何食はぬ顔して只管日の暮るゝを待ちたりしが、時は次第に過ぎて四邊は漸く暗くなりし頃、彼包物を懐にして又もや昨夜棒を打込みたる處に至り、包を打開きて中なる灰の如き粉を遍く周囲の地上へ撒初めたり。敬よし、これでいゝ先づ今夜

が幽霊試しの手始だ。と灰を撒終りて立歸り、部屋に入りて昨夜の如く窓際に差寄りつゝ、今や遅しと幽霊の現はるゝを待構えたり。既にして夜も更渡れば、最早其時分と例の細梯子を掛渡し未だかゝと片唾を呑んで控えしに、前夜と同じ場所に當つて幽霊は又もや出来れり。

それと見るより、敬次は直ちに細梯子を下り、前の如く忍びやかに進近きしが、行くこと未だ十二三歩ならざるに、其時橋の中央まで来掛りし幽霊は不圖立止まりしかば、敬次も同じく歩みを止めて屹と目を注ぎたり。其夜は昨夜の如く眞の闇ならず、肩より垂るゝ黒髪も雪の如き白装束もあり、と見え顔は遠くてよくは分らぬ。丈は甚だ高く見えたり。敬次は忽ち思起すや、宿の革籠の中には夜中用ゆべき眼鏡あれば、これを取来らば何もかも一目瞭然たるべしと、踵を返して細梯子の下に至りしが、振向き見れば幽霊は早身を翻して退去るにぞ、取逃しては眼鏡も何も益に立たずと、其處を捨て、直ちに跡を追掛け、足を早めて漸く二三間の隔りとなり、今や數歩にして追付かんとする途端、不思議なるかな、姿は地上を離れて空中へと舞上り、例の如く忽然として消失せたり。

敬次は呆氣に取られて茫然たるばかり夢か現かと疑ふて居たりしが、かゝる人間以上の動作を爲すからは或はこれ眞の幽霊なるかと思惑ひつゝ、隈なく其處等を搜索せしかど遂に何者をも見出し得ず、敬今夜は最うだめだ、ト空しく吉田屋へ立歸りしが翌日夜の明くるを待ちて再び山瀬川へと立出で、彼の灰の如き粉を撒きたる處に至りて見しに、灰は昨日の儘にて何の異状もなきにぞ、敬次は此に至つて始めて慄とし、斯く少しの足跡をも残さぬからは疑ふ處もなく寔の幽霊と、此迄かゝるものゝ世に存在せるを信ぜざりし身も、今は信ぜざるを得ざる場合となり、暫く腕を組み居たりしが、敬まだ、此儘では濟まさない、何處までも遣つて見る、トいひつゝ、懐より彼の灰の包を取出し、此度は他の方角に向つて撒初め、斯くて如何なる人なりとも此處を過ぐる時は、跡に印を残さずして通る事能はざるやうにして宿に歸れり。

其夜敬次は又もや窓に立寄りて見張を爲しに例の刻限となりて幽霊は前の如く現出でたり、敬次は直に飛出して其場へ行きしが、此度は幽霊は恰も立像の如く突立ちて身動きもせず、間は漸く十間ばかりとなりし頃、例の如く飄々として退き去

れり。敬幽霊は己の來るのを知つて居るな。そして上手に手品を遣ふに違ひな。ト足を急がして追付かんとあせりしが、幽霊は又逸早く退きて前の夜見失ひたる處に至ると同時に、又もや空中へと舞上りしが、何處ともなく見えなれり、敬次は爲さん方なく空を見上げて立居たりしが、敬もしも前が寔の幽霊なら己の力には及ばないかも知れないが、それでなければ今度は逃がさないぞ、ト自ら誓ふて立歸れり。

第六回

次の朝敬次は又も山瀬川へと立出で、彼の灰の如き粉を撒きたる處に至りしが、一目見るより、敬有難い、さア手掛りが出来た、ト叫びたり、灰の上には疑もなく人の足跡ありて、よく見れば方向は二つに分れ、正しく行きたると歸りたる跡あり、然も幽霊の消失せたる處より行きたる跡は置初め、歸りたる跡も其處にて終れり、敬幽霊に足跡は無い筈だ、ト敬次は直ちに四方を詮索し初めたり、素より此灰を一度踏む時は粉は直ちに着きて何處までも行先印を残すやうに作りしものなれば、敬次

は足跡の行衛を四方に求めしが右に左に尋廻りて最期に小高き岡の上に来りし時遂に印の灰をつけたる跡を見出した。

敬次は其跡に添ふて何處までもと進行き、一條の山路に差掛りしが、其處にて足跡はなくなりたり。それより又も八方を詮索して漸くにして一つ印の跡を見付けしが、爪先の方は前面の大岩に向ひ、岩の根には中の海暗き大穴あり、敬次は用捨もなく中に潜入りて進めば、數歩にして兩側は岩ばかりなる小路に出で、猶も進みて漸く岩の蔭を離れし時料らずも眺望絶佳なる一つ谷を見下したり。同時に木の間に一軒の家を見付けしが、それよりも猶喜ばしげに躍上りしは、此處より凡そ二十間ばかり隔てたる所に朝日の影を正面に受けて美しき一人の娘が立居たる事なり。敬次は直に其處へ下行きて話を仕掛けんものど行くべき道を望見しに、差渡しにすれば二十間ばかりなれども、其處へ行くには屈曲したる道を遠く廻はらねばならず、敬次は直ちに其方へと進行きつゝ思ふやう、彼娘は此方を見ざる事なれば、それと心付かぬ間に突然其前に出づるなるべしと漸く谷の入口に着きて娘が立居たる處へ行きしに、娘は最早其處に見えず。さては彼家の中に入りしかど家の前

に行きて言葉を交はすべき人やあると、其處等を見廻はせしが、人は一人もなく家の中も至つて静かなり、門を叩きしが返事もなし、稍暫く其處に行みて居たりしが、やがて無遠慮にも戸を開けて中へと進入れり。されど中には誰一人も居らず、部屋より部屋へと通りて捜せしが、遂に會はず、又も表へ立戻りて家の外を見廻はりしが、入らしき影だもなきに、敬次は忽ち一計を案じ、懐より短銃を取出して二三發打放したるに、程もあらず彼方の木の間に、恐ろしき顔付したる男一人、飛ぶが如くに此方へ走來れり。男誰だ亂暴な事をしたのは、敬私だ、男何故彼様な事をしたのだ、敬、此處へ來た處が誰も居ないから、短銃を打放したら誰か驚いて來るだらうと思つて放したのだ、男、全手前は何しに此處へ來たのだ、敬、咽が渴いていけな

いから水を一杯貰うと思つて來たのだ、男、嘘をついて偽り者め、敬、何が嘘だ、男、此處へ來るまでには清水のある處は方々にあるから、咽が渴けば勝手に飲める譯だ、敬、尤だ、實は水が欲しいのではない、正直の處をいへば、此家には誰が住つて居るのだから聞きたいのだ、男、其様な事は何うでもいゝ、直に此處を出て行け、敬、私は何も悪い事をする者ではない、男、何でもいゝから出て行け、敬、何故其様に追立てるのだ、男、己は此

家の主人で此周囲の土地の持主だ世を捨て、一人此處に住んで居る誰も此處へ来るのを願はない己は人間は大嫌だ分つたか分つたら出て行け敬嘘だ。男何をいふのだ敬今お前は一人此處に住つて居ると云つたらう男云つたが何うした敬それが嘘だ外にお前と此處に住つて居るものが有るだらう男は此時凄まじき顔してぐつと睨つけながら男命が惜しくば何にも云はず直ぐに出て行けト威付けたれど敬次は少しも恐るゝ氣色もなく敬何もさう急いで出て行くには及ばない男此處は己の地面だ己の許可がなくつて此處に居るといふ事があるか敬然し地面が減るのではなし別に差支はないではないか男手前は何うあつても行かないか敬私の聞いた事に返事をして呉れない中は行かない男モウ一度聞くが何うしても行かないか返事の次第に依つて手前の命は無いぞトいひながらずつと進寄りしが又立止りて男最期にモウ一言聞くが行くか行かないかト答を待ちて今にも握掛からんとせしが敬次は突然飛掛りて男の手首を締付けたり此一握に如何なる怪力やありけん見るゝ男の顔は正蒼になりて苦痛に堪えざる様子なりしが敬手向ひをすれば此通りだ覺悟をして掛かれト敬次は手を離して突戻せし

に男は大に恐れたる如く後へと退去りつゝ男お前さんは全株何の望で此處へ来たのだ敬外でもない今しがた彼處の樹の下で若い女を見掛けたが其處へ行つて見ると何處へ行つたか見へなくなつた其女は何處に居る男若い女などは此處には居やしない敬隠すな有株に云はなければ又前のやうな目に遇はせるぞ男其様なことを云つても女などは居ないのだから仕方がない敬まだ隠し立をするか私か其女を見たのは五分許り前の事だ男何と云つても此處には女は居ない前から居た事はありはしない敬次は猶も種々に言葉を盡して問試みしが男は何處までも女は居ずと言張るのみ敬次はそれより残りなく八方を搜索せしが遂に女の姿を見出し得ず是非なく一先づ立戻りて出直すべしと吉田屋へ歸來りしが店にて主人の秀藏に會ひしかばそれとなく彼の谷の事家の事などを訊ねしに秀彼家の主人は氣違ひ見たやうな奴ですあの谷間の地面の持主ですが人と交際もせずいつでも家にはかり引込んで居てめつたに餘所へは行きませんそして又自分の地面より内へは誰も入れません敬入れないと云つて入つて行つたら何うする秀それは餘程危険い事です

彼奴は恐しい奴ですから誰も傍へ寄付かない位ですもの生きて歸る事は出来ません。其男は只つた一人で住んで居るのか。外には誰も居ません昔から一人暮です。一人暮と聞きて敬次は眉を顰めしが何気なき躰にもてなして我が部屋に退きつゝ、敬よし今夜は手筈をして彼家へ行つて充分出来るだけの詮索をして見やう。其支度を取掛りしが彼是する内に早くも夜となりしかば十分に用意して身を固め風俗をも全く取變へて怪しき一つ家の搜索にと出掛けたり。

第七回

敬次は行くも心を配り不慮の事もあらんかと用心隠しく今朝過ぎたる道を辿りて漸く彼の一軒家を見下す險崖に着き屹と其方に目を注げば折しも牙渡る月の下に家は判然とよく見へしが表の戸は開放し有るに何故か燈の影は少しも洩れず敬次はそれより例の折曲りたる道を傳ひて家に續きたる通路へと下り足音を忍びて近寄りしが中は寂として人もなき氣色なり敬次は今朝既に一度此家の中を改めしが再びこゝに充分なる穿鑿を爲さんものと中に入りて部屋より部

屋へと通り細かに隅々までを能く調べ行きしが近頃女が居たると覺しき形跡は微塵もなきにぞ敬次は遂に見込の誤りしを發見したりそれより猥なく家の中を廻りて外に室やあると捜求めしが不圖今迄心附かざりし入口を見出し直に中に入りて目を配りしに片隈に梯子ありて家の下なる穴蔵への通路あり敬次はやがて用意したる小さき丸燈を取出し火を照して下に差向けつゝ靜かに梯子を下行けり。

梯子の中段にて足を止め丸燈をかざして穴蔵の中を見廻はせし途端何をか恐ろしき物に目をつけし知く思はず悸どしたりしが漸く下に來りて又もや丸燈を只有るものに照掛けたり何ぞ料らん床の上には生々しき男の死骸ありて首より肩は血だらけになりて横れり陰々たる土中の空氣は何となく腥く唯者ならば腰をも抜かすべき物凄まじき有様なれど敬次は一度氣を取直してより恐るゝ色もなく死骸に進寄りて顔容をよく見たりしが此死人は餘の者ならず此一軒家の主人なり敬次は猶も暫く身の内を改めて居たりしが何か思當る事のありけん、敬此奴だ。此奴に違ひないと思はず叫びたり。

かねてより敬次は彼の山瀬川の娘幽霊について思ふやう、幽霊の正躰は女にあら
 ず全くは或男が何か爲にする事ありて、白装束の上に假鬘を冠りて實地の茶番を
 したるなるべし。彼の川岸にて殺されしといふ美人の噂の高き折柄女の出立して
 夜中怪しげなる様をして現はるれば欺かれ易き里人等は直に幽霊とし噂の美人
 を想像して美しき娘の亡魂なりと云嘸すに至りしなるべしと、斯く始より心に定
 めて居たれど彼の幽霊の地を離れて舞上りし時は流石に此断定も崩れかけしが、
 今朝此家より吉田屋の師途に料らず又事實を發見したり。そは外ならず山路を辿
 りて山瀬橋へと來掛りし時幽霊の舞上りし處に近き大木の裏の枝に巧にも目に
 つかね結付けたる細を見付けたり。細の末はたぐり寄せて脇の節穴の中へ隠して
 あり。さては舞上りしと見し人も人を欺く手段なりしか。それにしても輕業師も及ば
 ぬ素早さと驚きながら幽霊は念本物ならずと思定めしが、今此死したる男をよく
 改見て此男こそ彼の幽霊の正躰なりと案出づる折しも、突然穴藏の上の左に當つ
 て、人の足音が高く響きたり。
 敬次は素早くも九燈に蓋を冠せ梯子の下に近寄りて上の者が降來るを待受け暫

く耳を澄して物音を窺ふに、室を彼方此方と歩む足音はすれども、此穴藏の上なる
 部屋の内には手を掛けぬ様子にて、其中に不圖足音は無くなりたり。敬次は用心し
 て徐々と梯子を昇り漸く上に出で、諸方を見廻はしたれど最早人の影も見えざ
 れば竊と家より外に立出で、遍く四方に目を配りたり。月は山の一角より清き影
 を送りて、敬次が立妾家の前に明了と見渡りしが、突然彼方の岩陰に火の光ひらめ
 きて短銃の音と共に彈丸は此方へ飛來れり。同時に敬次はキヤツと叫んで飛上り
 しが忽ち地上に打倒れて死したる如く身動きもせず。
 十五分ばかり過ぎたれど、敬次は猶横に倒れて居たりしが、やがて、敬何だ、詰らない、
 ト云ひつゝ起上りたり。彼が身は少しの傷もなく、彈丸は傍に近くさへ來らざりし
 が、態ど死せる跡を装ひて、敵を欺きて誘寄せんと計りしなり。されど敵もさる者と
 て容易く其手に乗らざりしか。敬次は計の成らざりしを見るより直に駈出して曲
 者の跡を追ひしが、最も鋭敏に最も注意を加へて鑿索せし甲斐もなく、遂に何處に
 隠れしか見出し能はず。搜ねあぐみて岩の前に暫く突立居たりしが、敬或は彼奴の
 仕業かも知れない。今朝見たのは確に秀子だ。して見れば彼奴何うしても此邊に潜

第八回

んで居る筈だよし今は取逃して仕舞つてもいつか一度は引捕へずには置かうか。ト
いひつゝ又も鋭き眼を放つて彼方此方と猶も綿密に搜索を始めたり。

最早いつまで敬次の素性を包むべき要もなければ少く彼の身上とこれに關係する事件とを述べし平田敬次とは假に設けたる名乗實は本編の主人公松井敏雄にして東京にて最も有名なる探偵なり姿を變へ顔を變へ年恰好を變へる事などは職務上とはいへ敏雄は殊更に巧妙にて忽ちにして少年となり老人となり或は美男となり醜夫となることさながら魔術かど怪しむばかりなり此度吉田屋へ來りし事の起をたづぬるに今より一年前大坂に白井勘彌といふ富有の人ありて二百萬圓ばかりの財産を獲して一朝取なく死したるが死際まで此人に一人の娘ある事は誰も知らず勘彌は亡き跡にと詳しく娘の事を記したる書状を残し其預先の家をも書添へ別に一の遺言状を作りて財産は盡く娘の秀子に譲渡し若し秀子が亡なりて跡に相續人のなき曉は東京なる姪の梅代に與ふべしと認めて始末

残る方なくして冥土へ赴きしがこゝに珍事の起りしは死後十分と経たぬ中に秀子の事を記したる書状は何れへか紛失したる事なり百方搜索を盡したれど遂に知れず財産の保管人は二百萬圓の金を持ちながら肝心の渡すべき秀子の在處の知れぬに當惑し種々詮議の末遂に東京なる姪の許へ使を遣り親しく梅代に遇ふて秀子の在處を聞合はさする事となり若し又梅代が勘彌の遺言状の機子を知らば或は悪意を挟む事もあらんかと固く其事は使に口外させぬやう言合めて遣りしに使は其意を領して東京へと出發せり。

來て見れば梅代は烏尾専六といふものゝ妻となりて居たり此専六は上州の生れにて幼きよりよき教育を受け人品もよく見掛は立派なる男なれど放蕩無頼にて故郷を離れ處々を流浪せし中に不良の噂は屢ありしに廻りて東京に來り料らず梅代と縁を結びて此處に御輿を据えしが今大坂の使が尋來るに會ふより姦智に長けし男とて種々に問落し遂に遺言状の一條を口走らせそれと聞くより惡計を胸に浮べて妻を説きて見たりしに似た者夫婦とて梅代も容易く同意し夫婦心を合はせて秀子は女學校に寄宿中計らず病を得て死したりと使を欺きて歸し

たり。
 其時此家のお針にお貞と呼ぶ老女ありしが不思議なる縁は此女其昔秀子を里子
 に取りたる事あり。それは父の勘彌が未だ東京に住ひし時襦袢の中より秀子は里
 に遣られてお貞の家へ預けられしが、それより十一歳の春まで生の子の如く慈ま
 れてお貞の家へ育ちたり。其頃父は既に大坂に有りしが、彼方より父の手紙を持
 たる使者來りて、勘彌の命令なりとて秀子を連行けり。お貞は只管別離を惜みしが
 詮方なく、其後零落して此家へお針となりて住込みしが、一日不圖専六夫婦の物語
 を洩れ聞きしに、勘彌秀子などいふ名前の折々耳に入るに、若しや我が秀子の
 事かと猶も聞き立て、初めて此家の夫婦が勘彌の縁者なる事を知り、又勘彌の没
 したるをも知り、次で夫婦が悪工の一端を残りず聞取りて大に驚き、いまだに忘れ
 かねる可愛き秀子は二人の爲に此末如何なる目に遇ふやも知れず、こは何とせば
 よきと案じ煩ひしが、二日ばかり過ぎて専六夫婦はお貞の知らぬ間に旅装を整へ
 て大坂へと出立したり。
 お貞は跡に心を傷めて早く大坂なる保管人の許へ事情を詳しく告げて遣りたけ

れど、名も處も知らねば詮術なく、跡追掛けんにも貯蓄に乏しければ行かれず暫く
 は途方に暮れたりしが、不圖胸に浮出づる事あり、お貞の再甥に松井敏雄といふ人
 ありて、當時探偵の職を奉じて居たりしが、年は若けれど、智達ましく心猛く、殊に
 弱きを扶け強を挫く、俠氣肌なれば、此人に一臂の力を頼まんとて直に敏雄の許に
 行きて事情を話し、何卒専六夫婦の企計を打破らん事を真心籠めて頼込みたり。
 敏雄は俠氣に富みたる男なれば、一も二もなく承諾し、素より貧しからぬ身とて直
 に職を辭して憐むべき秀子の保護に全力を盡し、専六夫婦の跡追掛けて大坂へと
 乗込みたり。折よくも未だ専六が悪事に着手する前なりしかば、敏雄は遺産の保管
 人に遇ふて秀子がまだ存生へて居る事を告げ、これより在處を搜索せんと云出で
 たり。間もなく専六は梅代の代人となりて保管人の許に來りしが、様子の變なるよ
 り心付きて、若しや早くも我が仕事妨げんとて東京より來りし者ありしかと疑
 初め、何にもせよ肝心の玉を奪はれてはならず、人の手に渡らぬ中に素早く秀子を
 擒にし、其上ゆるく計を廻らさんと思ふ折しも、先頃勘彌の家へ同居せし梅代の
 伯母ありしが、一日専六夫婦の許へ尋ね來りて二人に賣るものありとて示すを見

れば、これぞ先日紛失したる書状なりける。専六はこれを得て大に喜び、後々遺産を手に入れし時、幾何の分前を與へんと約し、直ちに秀子の方へと出發せり。此の如く二方三方皆秀子の敵となりて、彼の二百萬圓を貪らんとする中に、敏雄は獨り鋭き眼を見張りて、彼等の跡を付廻はし、只管彼等を打越がんと力を盡したり。

これより先、秀子は父の計らひにて十分なる教育を受けさせんとて、お貞の家より移され、當時名高き名古屋なる紅梅女學校の女教師某の許に預けられ、其處にて良き薫陶を受けて、天晴なる淑女となりしが、一日、専六は勘彌の偽手紙を持ちて、女教師の家に來り、秀子を連踏るべしとて、手早く支度をさせ、急ぎ伴ひて、其處を立去れり。二時間ばかり後に、敏雄は専六の跡を追ふて同じく其家へ來りしが、秀子は早速行かれたりと聞きて、足らずして無念がり、直に引返して飛ぶか如くに追行きしが、専六は前より我跡をつけたる者ありと知りて、直に大坂へは行かず、能とだしぬかんとて、道をかえて影を隠せしを、敏雄は追ひつて、遂に足柄山まで付來り、其翌日吉田屋に來て、第一回に見えたる人殺の事件を目撃せり。

彼夜、敏雄が突然姿を隠して、何れへか行きしは、他の人々と同じく、秀子は殺されは

せざるかと疑ひ、死骸の搜索にと出立せしなり。敏雄はそれより一人の老人と姿をやつし、日毎に川岸を尋行きしが、爺幽霊とて怪しげに囁かれしは、全く此敏雄の事にてありしなり。彼の不思議に姿の消失せしと見へしは、少しも不思議の事にあらず、これぞ敏雄が得意の巧妙なる術にて、其實は瞬く間に早變りをして見せしなり。彼の若者が爺幽霊を追ふて森の中に入りし時、出遇ひたる狩裝束の紳士は、即ち敏雄にて、老人より急に早變りをしたるなり。又八人の若者が爺幽霊を捕へんとしたる時も、同じ手段にて洗濯の女に姿を變へしなり。敏雄はかくて川岸をわさり歩きし中に、料らず山瀬橋の娘幽霊の囁きを聞き、幽霊などいふ事は素より信ぜざれども、若しやそれは秀子にはあらぬかと、此度は又別の老人と姿を變へ、平田敬次と名乗りて吉田屋に入込みしなり。それより前回の如き探索を爲して、漸く幽霊の正體を發見せしが、其朝田舎には有まじき風俗の美人を見掛け、其夜短銃を打掛けたる曲者に出遇ひて、彼此思合はするに、此曲者こそ正しく専六ならんと、勇氣一倍して、詮索に取掛りたり。此より打續きて驚くべく恐るべき出來事の間に、敏雄が技倆を顯はす事は、次回より述べべし。

第九回

谷間の一軒家に主人が殺され居たりし翌日其邊を此處彼處と徘徊する年若き紳士あり狩裝束に身を固めて元込の獵銃を提えたるが重合へる岩の上を踏歩き、何をか切りに搜索する如き様子なりしが、やがて岩の挾間の窪みたる處に下立ち、銃を傍に立掛けて暫く岩蔭に打休みつゝ、腰なる辨當を取出して食事を始めたり。此紳士は別人ならず敏雄が例の如く姿を變へしなるが漸く食事を終りて箸を休むる折から、今しも中天に差掛る日光に照付けられて前の崖に突立つ一個の大岩ありしが、其岩に突然怪しき影法師が映りたり。敏雄は素早くも屹とそれに目を向け鋭き一瞥に兩三個の人の影なる事を見定め、而も其影の怪しく躊躇ひて動く如きに、其人は竊と忍歩くものと判せしか、間もなく其影はなくなりて、俄然銃の音と共に彈丸は敏雄の頭上に飛來り、横の岩に當りて破裂したり。敏雄は少しも騒がず直に立掛けたる獵銃を押し取り、傍の岩を小楯に取つて二度目の襲撃を待掛けたり。先程近くを徘徊せし時、敏雄は何者にか付視はれ居る事を氣覺りしが、察する所

昨夜の曲者は我が追掛來りて此處に在るを知り、悪者等に金を與へて我を殺させんとするなるべしと、心を配りて今かくと敵の近づくを待ちたるに、暫くして雲突く如き大男一人、崖の彼方に立顯はれ、續いて又一人出來りしが、敏雄が姿は岩に隔てられて彼方より見へず、しきりに下を見廻はしてやがて、徐々敏雄の居る方へ下來れり。續いて跡より又も二人の大男都合四人手に、銃炮を持ちて進來れり。敏雄は彼等の不意を撃んと、猶も岩蔭に身を忍ばして居たりしが、既に間は一問ばかりとなりし途端、突然大喝して彼等の前に躍出でたるが、凜然たる威風は自ら備はりて當る可からざる勢あるにぞ、四人の者は不意を喰つて思はず跡に逃出さんどせしが、敏其處動くなと敏雄は再び叫んで押し止めたり。敏雄は誰奴だ今己に銃炮を打かけたのは、男、それは私共ぢやア御座いません、私共は今日未だ一度も火蓋を切りません、敏雄を吐言すと此銃で一人、頭を打貫いて呉れるぞ、手前達は人に頼まれて己を撃に來たのだらう、男、其様な事はありはしません、私共は黒岩村のもので、鳥を打ちに銃炮を持つて連立つて來たのです、ト何處までも包隠すにぞ、敏雄は彼等を誑らんと、何か物音を聞付けたる如く態と後を振向

きしに前なる一人の男は油断を見済まして手早く鐵炮を取直し敏雄の胸板目掛けて打發さんとせしが其時遅し敏雄は直ちに飛掛り首筋握んで地上に投出せば殘る三人は此跡を見るよりも逸足出して一目散に逃出せり。

敏野郎手出しをすれば命は無いぞト打倒れて腕居る男の傍に近寄れば男何うぞ御免なすつて下さい本の冗談で爲たのでございませぬ何卒御免なすつて敏野郎遣らないものでもないがそんなら己の聞く事に正直に返事をするか男何でも申します敏野郎の名は何といふ男六藏と申します敏野郎何處の者で何をして居るのだそして誰に頼まれて己を殺しに來たのだ六藏は黒岩村の百姓です誰にも頼まれはしません本の出來心で旦那の金を取らうと思つて……敏野郎まだ嘘をつきやアがるな覺悟をしろト獵銃差向けて直ちに打放さんとすれば六藏……どうぞお助けなすつて下さいモウ嘘は申しませぬすつかり白狀を致します敏野郎度か六へ少しも偽りなく申上げます敏野郎そんなら其處へ腰を掛けるト引起して岩に腰掛けさせ敏野郎今度は有跡に云はなければこれだぞト六藏が兩の手首を捕へぐつと力を籠めて握むれば骨も碎けんばかりの痛さに六藏は聲をお

げて悶苦むにぞ敏野郎は漸くに手を離して敏野郎だこたへたか六モウ何でも正直に申します敏野郎善し第一に手前は誰に頼まれたのか白狀しろ六頭領に言付けられて來ました敏野郎頭領とは何者だ六へ……それを云ふと私は頭領に打殺されませぬ敏野郎はなれば命は無いぞサア覺悟しろ六ま……待つて下さいそれぢやア申します申しますから私が口外つた事を誰にも云つて下さるな敏野郎にいふものか六それぢや申しますが其頭領は山中源吾といふもので私も先刻來た三人の奴も皆其手に遣はれて仕事をして居るので敏野郎何んな仕事をして居るのだ六へ……其……敏野郎はないか又これだぞ六申します……實は其價金を製へて居るのです敏野郎何處で六此近所の岩窟の奥です外から見つて分りませんが中は廣大な洞穴の中で仕事をして居るのです敏野郎其源吾といふ奴が何故己を殺さうとするのだ六頭領は旦那が其筋の役人だといふ事を知つて居ますそれで今日私共に命令けて彼奴は探偵だから生かしや置けないこれから直に行つて打殺して來い然し手剛い奴だといふ事だから用心して行けと云つて鐵炮を渡しましたたそれから直に跡をつけて此所まで來たのです敏野郎手前の頭領は一時何うして己

の事を知つたのだ。六、そりや先達私共の棲窟へ来たものが有つて、旦那の事を頭領に話したからです。敏其奴は何んな奴だ。六、鬚の生へた立派な人です。敏其事を詳しく話して聞かせる。第一其男の来たのは何日の事で、其時の様子は何んなであつた。六、彼の人の来たのは餘程前の事です。或夜更に頭領と私が仕事場から出て洞穴の道を傳つて来ると、入口の方で突然に人聲が聞きました。全躰其處は人が来るやうな處ではなし、若しツキが廻はつたんぢやないかと頭領は驚いて、手前は其處に忍んで居ると私に言付けて、頭領は一人竊と様子を見に行きました。すると又女の聲が聞きました。暫くして三個の人が此方へ来ました。敏其それは何んな奴等だ。六、一人は頭領で一人は先程云つた鬚の生へた人で、跡の一人はすばらしく美しい娘です。敏其娘は何んな様子であつた。別に嫌な顔をしては居なかつたか。六、娘は泣いて居ました。頭領は連の男と何だか仲好さうに話しをして居ましたが、どうく二人で嫌がる娘を引立て、奥へ連れて行つて仕舞ひました。敏其後娘は何うした。六、何うしたか其晩きり私は娘の影を見ません。然し其鬚の生へた人はそれから頭領と一處に居て、前からの馴染と見へていつでも睦まじく話などして居ますが、時々

娘の事をいふのを見れば何處奥の部屋へ隠して有るに違ひありません。敏其それぢやア其鬚の生へた奴が己の事を探偵だと頭領に話したのだな。六、左様です。敏其手前は何うして其を知つた。六、今朝私共も頭領も一所になつて仕事をして居ますと、彼の人突然に泡をくつて駈込んで来て、頭領を脇へ呼んで旦那の事を話し探偵が此隠家を探がしてゐるつて云ひました。敏其猶も隠家への道筋を細かに聞き、別に口止もせず六蔵を放還したり。専六が秀子を連れて潜居る事は最早明白となりしかば、敏其は危険を冒して單身岩窟の中に踏入り、秀子を奪回さんと大膽にも決心せり。素より敵は大勢なり味方は一人なれば、十分覺悟を極めて行かずばならず、何にしても夜にならねば大に便宜悪しと、それより態と山の麓に下りて何處へか身を隠せしが、日の落かゝるより早く再び本の道に引返し、六蔵が教へたる岩窟の道へと急行きたり。目印の岩角を曲がりて道もなき道を踏越え、屏風岩の間を潜りて險しき處を進行せば、人の棲まん事は思も寄らぬ岩ばかりの間に細き一條の通路あり。敏其は漸く敵の棲處に近きたりと思へば、悟られじと竊と進寄る折しも突然向より人の足音

聞え、此方へと近づき来る様子なり。時は早夜となりて前面はすかし見ねば分らぬ。彼方より来るは疑ひもなく敵の一人なるべし。狭き道なれば脇に潜みて遣過すこともならずと、敏雄は早くも覺悟して待掛けしが、不圖星明りに見れば右なる角の岩に裂けたる處ありて身を隠すに都合よく脇より他の岩の差出居るに暫く其處に忍びて様子を見んと、ひらりと飛上りて其中に屈入る途端彼方の人は早間近く進來りしが、忽ち敏雄が隠れたる岩の前にて急に立止まれり。

第十回

敏雄は手出しを爲さば飛掛らんと屹と前に立止りたる男の方を見て居たりしが、彼方は暫く立つたるまゝ、隈なく四方を見廻はし、やがて小首を傾けて聲低く獨言くやう、男ハヲ變だ。何でも此方へ来る人の足音がして急に立止まつたやうに覺えたが、ト猶も其處を動かざりしが再び又奥へと引返し行きたり。敏雄は音も立てず身輕に岩を飛下り竊かに跡より躡けて行き、遂に岩窟の入口らしき處へ達せしが前の男は不思議なる素振して片手と片膝をつき短銃の如きものを取り出して蓋

を取る如く見へしが、其先より忽ち射る如き火光あらはれて前面を照らすに、彼男は其燈を彼方此方に差向け、恰も入口を搜索する如く見へたり。敏雄は此舉動をつくづく見て思ふやう、此人は岩窟の中の仲間にはあらず、様子



敏「お前と同じやうな仕事に來たのだ。男己の仕事は何だと思ふ。敏「お前は探偵だらう。男己が探偵だと敏「左様よ、確かに左様だ。男處が違つて居る。己は鹽金遣だ。手前は探偵だ。敏「ナニ手前は鹽金遣だと、男其通りだ。」

敏雄は聞くより突如飛び掛りしが敵は早くも短銃を打掛けたり其火のひらめきも未だ消えざる中に敏雄は敵の両の手首をひッ握み例の怪力に締付ければ男は忽ち悶苦みて振放さんと腕くに敏雄は暴な事をする奴だつまらない真似をして二人の仕事を一時に空にする今の短銃の音は内の者を驚かしたに違ひないといひつゝ手を離して突進れば男恐ろしい鬼見たやうな人だ敏雄は聞くがいゝ己の眼は決して違はないお前は價金遣の張込みに来たのだらう隠してもだめだ己はちやんど知つて居る決して氣遣ふな己は此岩窟へ潜んで居る一人の悪者の詮議に来たのだ男確にか敏雄をいふものか嘘なら今押付けた手を放して此様に餘計な徒言を云つて居るものか男成程敏つまらない同士討をするより早く仕事に掛らなけりやアいけないぢやないか男恐入つた實はお前を悪者の仲間とばかり思つてそれで彼様な事をしたのだいかに私探偵で横井貞明といふものだそれぢやア此から直に力を合せて遣付けやう

此時横の岩に當りて奥よりピカリと火の影差したり敏雄それ見た事か先程の短銃の音を聞付けて中の奴等が出て来た一先引退いて何處へか忍ぼう真ほんに後先

見ずの事をした忍ぶ處はあるのか敏雄は素より注意深く先程貞明が来たる時隠れたる岩間を能く記憶して居たりしかば直に導きて其處に行き二人身輕に飛上りて身を隠したり程もあらせざドヤ〜と足音して中より出来たる六人ばかりの男前なる二人は炬火を翳して進来り二人が隠れたる處に近づきて立止まりしが甲何だ何も居やアしねえぢやアねえか手前は儘に鐵炮の音を聞いたのか乙儘に聞いた然し誰も居ねえとは變だなア両手前の耳は能く間違ふぜ此間も頭領の駒を聞いて虎が来たつて騒いだぢやアねえか丁然し己達が来たので逃げて行つたかも知れねえ屹度探偵が嗅付けて来やがッて己達が居るか居ねえか試めしに遣つたのぢやアねえか戊探偵だつて何だッて恐い事はねえ此處等へ足踏をしやがれば打殺すばかりだ

敏雄と貞明は猶も息を静めて潜み居たり悪者等は暫く道々を詮索して居たりしが幸に此處を見洩らしてやがて何事もなしと思定め漸くにて本の道へと引返し行きたり二人は火の影の遠く退去るを待ちて再び竊と飛下りつゝ又もや奥へと進行けり敏雄は此處にて專六の事を摘要んで物語り我が姓名をも明かして共に

踏込まんと手筈を定めつゝ、前の入口らしき處に至り、又も貞明が短銃仕掛の小燈を取出して、細かに岩々を搜索せしが、遂に入口を見出し得ず。それより猶も十分なる穿鑿を爲して、漸くにして敏雄は一つの岩間を發見し、此處にて貞明は表に待ち、敏雄一人其中に進入りて、奥を見極めて來らんと云出し、短銃燈を手に取上げて、忍込みたり。

進むに連れて道は次第に廣くなれば、見込は違はざりしと敏雄は忍びながら足を早めしが、行けども、奥に達せず、遂には全く方角の違ひたると思ふ方に進行くにぞ、さては道を違へしかと引返さんとする折しも、突然近く聞ゆる女の泣聲、敏雄はハッと立止りて耳を澄ませば、忽ちにして其聲は止みたり。敏雄は胸を轟かしながら聲せし方へと近き左に折曲りて七間ばかり進みしに、端なく岩の行留りに着きたり。折しも再び聞ゆる女の泣聲續いて高く悲鳴を上げしが、バツォリ止まりて潜りとなりしにぞ、敏南無三折角此處まで漕付けて來た途端、或は秀子が殺されて仕舞つたのではないか、ト心をあせりながら入るべき處やあると諸方をあなぐり求めしが、遂に巧に糺合せたる岩を見出した。手を掛けて押すに中へと容易く開

きたるにぞ、敏めめた、ト早くも潜入りて洞穴の中を二三間ばかり進行きしに、又々聞ゆる女の泣聲荒々しき男の聲も交りて、此度は手に取る如く定かに響渡れり。五六歩にして燈の影あらはれ、今三四歩にして其場に着く處に進み、耳を着くれば、男は慥に專六の聲、此處ぞと敏雄は氣を落付け、忍近きて隔の戸口より窺見たり。只見る專六は前に突立ち、下には過日谷間にて見掛けたる乙女が手を合はせて泣沈み居たり。乙何卒助けて……、專此期に及んでモウだめた、念佛唱へて往生しろ。乙何卒慈悲に……、專餘計な痴言を云はずに素直に死亡れ、痛くないやうに殺して遣るは、乙、それでは何うあつても助けては下さらないのか、專まだくづ……云やアがるか、覺悟をしろ。ト飛付く途端、敏雄は忽ち室に躍入りて、敏退さり居らう。ト睨付けたり。

專六は顔を見るよりヤツと打驚きて後へ下りしが、忽ち身を翻して奥へと駈入りたり。彼奴必定仲間の悪者を呼集めに行きしなるべしと、敏雄は早く思廻らして急がはしく乙女に向ひ、敏貴娘心を丈夫にお持ちなさい、私が來るからは貴娘に指でもさす事ではない、貴娘は秀子さんでしやう。乙ハイ左様です、敏サア早く私と一

所に此處をお出なさい。彼奴は悪者共を連れて直此方へ引返して来ます。秀覺召は有難うございませぬが、私は行かれませぬ。敏雄は此答に打驚き、敏貴娘は私を信用なさらぬか。秀左様ではございませぬけれど、私は行かれませぬ。敏分らん事を仰有る。今の男は貴娘を殺さうと掛つたではございませぬか。秀、ハイ、敏貴娘は殺されても構はないといふのですか。秀、假令殺されても行かれませぬ。敏何故。秀、貴郎は今の人が何者だか御存じありませんか。敏、彼奴は悪者です。秀、然しあれは私の父です。私は殺されても父を見捨て、逃げるのは嫌です。敏、あれが貴娘の父上です。秀、ハイ、敏、太い奴だ。奴彼全く貴娘を欺したのです。秀、何と仰者います。敏、彼奴偽つて貴娘の父だと云つて貴娘を誑かしたのです。親が子の命を取るといふものが何處にあるものですか。秀、然し先刻の仕方は本氣とは思はれませぬ。まさか本當に私を殺して仕舞ふといふのでは御座いますまい。いひつゝ、不思議さうに敏雄を見て、秀、貴娘は一跡何人です。敏、私は松井敏雄といふもので、以前貴娘の里親であつた。お貞の再甥に當るものです。お貞は未だに貴娘を愛して居ります。此度も貴娘の身の上が氣遣はしとの餘り、何卒して悪者等の手にかゝらぬやうにと、折入つて私に頼みましたの

で、危険を冒して漸く此處まで参つた譯です。秀では彼の人は私の父ではございませぬか。敏、貴娘の父上は彼様な悪者ではありませぬ。彼は貴娘の従姉の梅代の夫で、梅代と共に貴娘を陥れやうと企計んで居る奴です。秀、それなら私の父は……貴郎は父を御存じですか。何故又父が彼人に私の身を托したのでしやう。敏、其をお話し申せば長い事ですが、今は一刻も猶豫しては居られませぬ。決してお氣遣ひをなさいますな。私は飽くまで貴娘のお爲を計るものです。敏雄の言葉は未だ終らざるに、奥の方に多人數の足音聞えて、此方を差して駈来る様子なり。專六いよゝ、仲間の悪徒を連れて引返せしか、時は逼れりと敏雄は急がはしく秀子に向ひ、敏、最早少時も長居は無用です。兎も角急いで此處を立退かねばなりません。さもなくば二人とも命は有りませぬぞ。秀、私の爲に貴郎に御難儀を掛けては濟みませぬ。私にはお構ひなく早くお逃げなさい。私は運次第と諦めますから、此處へ獨り捨て、お置き下さい。敏、何を仰有るのです。私は何故に此處へ来たとお思ひなされる。貴娘を助けやうばかりに命を掛けて来たからには生きて歸らぬまでも一人此處を出られませぬやうか。サアお出でなさい、まだ少しは時はあります。秀

誠まことに有難ありがたうはございませぬが……敏遠とんえん慮りょをなすつて居ゐる時ときではありませぬ。サア早く、ト急いそぎ手を引ひいて巖いわ窟くわに入い入りし岩窟いわくわの口くちに導みちき前に押お遣やりつゝ口くち早はやに、敏此とんこ道みちを早はやくお逃にげなさい。若わかし行ゆけたら私わたしも跡あとから續つきます。然しかし萬ま一いつにも私わたしが來こなかつたなら、此岩間このいわまを出でた處ところに正實ただしかな男おとこが居ゐますから、それに頼たのんで安全あんぜんな處ところへ連れて行いつてお貰もらひなさい。此處こゝに後々のちのち貴娘あなたが身みの處置しよについての書類しよるいがあります。トかねてより不慮ふりょの事こともありし場合ばいばいに認した置めきたる書類しよるいを與あたふれば、秀ひでとして貴あなた郎らうは何なにう爲なさる思召おもひめがです。敏とん其様そのさまな事ことを云いつて居ゐらしつては遅おそくなる。一時ひとときも早はやくお逃にげなさい。跡あとから直ただに參まります。サア早はやく早はやく、ト押遣おしやる間まもなく、敵たかは既に近ちかづき來きるにぞ敏雄とんゆうは直ただに跡あとへと引返ひ返し以前いぜんの室むろへ飛入とるより早はやく、中なかに點つけたる二ふたつの洋燈やんぢを、弗なとばかりに吹消ふしたり。

第十一回

敏雄とんゆうは覺悟かくごを極まめて恐氣おそもなく、泰然たいぜんとして敵たかの近ちかづくを待受まちうけしが、足音あしなは室外しやうがいにて確たしかと止とりたり。さては何か陰謀いんぼうを工たくらみしよなど、早はやくも身みを退ひりて戸との外がに

出いで、洞ほらの片蔭かたかげに躰たを寄よせたる間ま一髮轟然いつぱつこうぜんたる鐵炮てつぱうの音ねは關かを破やりて彈丸だんがんは轟とに敏雄とんゆうが立たつたる處ところに飛來とれり、かくと見るより敏雄とんゆうは直ただに身みを伏ふして岩窟いわくわの前まに這出はいで、用心いんしん嚴げんしく岩間いわまの細路せろを行ゆかんとする折ましも、何者なにものか行手ゆきでの方に佇立たむやうなるにぞ、星明ほしありに透として見みれば、秀子ひでこなり。敏貴娘とんきたは何なにをして居ゐらしつたのだ。何故な早はやくお逃にげなさらん。秀私ひでわたしの爲ために貴郎あなたを殺ころさして、おめく落延おびて行くことが出來こましやうか。貴郎あなたが助たすかつて此處こゝへお出いにならぬ内うちは、一歩いっも先まへ行くまいと決心けつしんしました。

敏雄とんゆうなる敏雄とんゆうの耳みみは此時このとき早くも怪あやしき物音ものねを聞き付け、急いそぎ手てを取とつて秀子ひでこを前に屈かませ、其身そのみは後に楯たてとなつて同じく地上ちやうじやうに身みを伏ふしたる。圓間ゑんま又またもや轟然こうぜんたる響ひびと共ともに飛來とる彈丸だんがん次つぎいて一發いっ又また一發いっ、四邊しへんは忽たちち修羅場しゆらばうと變かじて、頭上かぶさうを掠さらむる彈丸だんがんは雨あめよりも繁しく、二人ふたりの命いのちは風前かぜまへの燈あかりよりも危あやし。敏起上とんおつてはいけません。靜しずかに屈かんで居ゐらつしやい。トいひつゝ、少すこし首くびを持もつて屹いと前後ぜんごを見定みめ、敏サア前まへ這はつて行いらつしやい。立たつてはいけませんよ。秀私ひでわたしは何なにうあつても貴郎あなたを餘よ所ところにして一人助ひとりたすかるのは嫌いやです。秀ひでいふ事ことを聞きかなければ二人ふたり共に殺ころされて仕舞しひ

ますよ。秀貴郎が殺されるなら私も殺されます。敏其様な事を云つてはいけません。私の云ふ通りにすれば二人とも助ります。サア前へ這つてお出なさい。私も行きます。

秀子は漸く言葉に従ひて行けり。敏雄は猶も前後に目を配りて居たりしが、やがて用心しつゝ、急ぎ秀子に追付き、敏最う立つても其うございませぬ。サア出来るだけ急いで行かねばなりません。ト介抱しつゝ、岩間を駆行きしが暫くして秀子は俄に立止まり、秀先方に誰か人が居るやうです。敏、人が居ますと、それでは暫く此處に待つてお出なさい。行つて様子を見て來ますから。敏雄は前に進出で、未だ五六歩ならず、幽かに一人の男の立つたるを認めしが、同時に其男の手元に短銃の音ありて、銃丸は彼方へと風を破つて行けり。敏雄は早くも此男は貞明にして、今の一發は出口に向けて打掛けたるを知り、足音高く進寄れば、其處へ來たのは誰だ。敏味方だ。貞松井君か。敏左様だ。貞危ない。下に居たまへ。彼奴等は我々の來たのを悟つて、早十二人ばかり手配りをして前回へ廻つて居る。敏雄は直に地に伏して貞明の傍に這寄り、秀子を救つて此處まで運來りたる事を物語れば、貞それはいかん。何うし

て此處を斬抜けられるものか。此様では我々だけでさへ生きて逃がれるのは覺束ない。まして女を連れて兎ても助かる事は出来ない。敏、ナ、彼奴等の中の二三人を驚かして度勝を抜いて遣れば、譯もなく手を廣げて歸る事が出来る。貞然し皆命知らずな奴等だぜ。敏高が知れてる。何うするものか。お前はマア此處に居て秀子を護つて呉れ。私は行つて一つ遣付けて見やう。貞何うする積りだ。敏構はず前へ進んで行くのさ。貞亂暴な男だ。一人で大勢に向つて兎ても敵ふものか。彼處に突出て居る岩から先へ出たが最期直に彼奴等に取りめられて仕舞ふ。敏然し我々は何うしても此處を出なければならぬ。マア暫く私のするのを見て居たまへ。ト身を屈めて前へと進出で、貞明が云ひたる岩を楯に取りて向ふを見渡せば先に來たる出口の路は僅の距離なるにぞ、此處をさへ首尾よく出れば跡は便よしと思ふ。折から不圖此方へ近く人の足音の聞えしに、さては敵の一人様子を見に來りしかど、身を潜まして岩蔭に隠れ、息を殺して近くを待構へたり。彼方は斯くとも心付かず次第に此處へ進來り、今や一歩にて岩に達せんとする途端敏雄は突然飛出して取つて押え、揉合ふ中に早くも手首を握んで例の不思議の一掃聲や立てんと片手に咽元を締

付け振返りて貞明を呼立つれば、急ぎ此方へと駈来りしが、様子を見るより心を利かして用意の猿轡を取出し、力を合はせて忽ち曲者を縛上げたり。敏雄は又も一人進出で、敵は何處にと前面を見れば、行手の道の咽元に當つて、屈強なる男共十人ばかり、手にく得物を持つて控えたり。正當に立向は、勝を取らんことは覺束なし。其しさらば氣を以て打挫ぎ、呉れんとかねて用意の連發銃を取出すより早く、大喝一聲、群がる中へと喚入り、釣瓶かけて七八發打發せば、不意に驚く曲者等は、わつと怖えて逃散つたり。今は心易しと再び貞明を呼び、秀子連れ、此方へ進めと近づけて、敏サアお前の身軀で秀子さんを圍つて首尾よく此處を脱けて出て呉れ。此處一時、肩を入れて遣つて呉れ。貞明も此場合に臨みたれば、十分秀子を保護せんとて、やがて秀子を扶けて急ぎ行けり。敏雄は跡に踏止まつて殿りし、曲者等が逃散りたる方に向けて、續けざまに銃丸を打發せしが、彼等は恐れたるか遂に出で來ず、かくて稍暫く時を過として、貞明も早本道に達したりと思ふ頃、漸く引返して跡より追付きたるに、誰一人遁るものなくて、遂に安全なる山道に出で、それより三人足を早めて行手を急ぎ、黎明近き頃やうく一村に續きたる街道に着きたるが、貞明

は此處にて二人に別れ、曲者等か未だ影を隠さぬ中、急ぎ擄捕るべき手配りをすべしとて、地方警察署へと走行きたり。敏雄は秀子をいたはりつゝ、村口に來りしが、素より足弱の身とて、秀子は殊に疲果て、其上先刻の如き場合なれば、足袋蹴のまゝ逃出して、險しき道を越來りしかば、人家を見たる時は、がっかり氣落ちして、最早一歩も進まれぬ躰なるに、敏雄は種々に勞りて、只有る村は、づれの百姓家に入り、主人に頼みて暫く其處に足を休めしが、秀子は弱切りて、此上歩出づべき氣力もなければ、敏雄は主人に向ひて、敏オイ御亭主、此近くに駕籠はないか。圭左様、隣村まで行かなければありません。敏其處まで道程は何の位ある。圭、サツト半道もござります。敏「それでは秀子さん、私はこれから隣村へ行つて、駕籠屋を連れて來ますから、少しの間、此處に待つて居らっしゃい。秀何うも誠に御面倒をかけて相済みません。敏、ナニ其様な御遠慮には及びません。それでは急いで行つて來ませしやう。トそれより主人に呉々注意して、確り秀子を預け、敏雄は獨り此處を出で、隣村へと急行けり。半時間も立たぬ中に、敏雄は駕籠屋を連來りしが、門口に入るより先づアツとばかりに驚きたり。第一に目に留りしは、主人の姿、猿轡を嵌められて、後の柱に縛付けら

れたるに、南無三と駈入りて秀子を求むれば、何處へ行きけん影だに見へず、急ぎ主人の縛を解き、猿轡を除し、せき込みて様子を問ひかくれば、敏雄が出行きたる直跡に、鬚の濃き大男が押入りて、矢庭に秀子を引捕へ、主人を斯の如くに縛り上げて、辭む秀子を無理やりに連行きたりと語るに、さては跡より専六は竊かにつけ來りて折角手に入れし玉を奪返せしかぬ、ぬかりけりと敏雄は齒齧を爲し、遠くは行かじと狂氣の如く、急がはしく、駕籠屋に酒手を與へて歸し、血眼になりて専六の跡を追掛けたり。

第十二回

道といふ道は、殘る處なく、搜索したれど、敏雄は遂に専六に會はず、若しや再び岩窟に潜入りしかど、昨夜の道へと急行ししに、途中にて一群の人に行遇ひたり。前なる十五六人は、悉く後手に縛られ、後に繩を取りて、巡查探偵の追立來るにぞ、さては早くも手配ありて、匭金遣の奴輩は捕へられしよと、只見れば、貞明も其中に交り居たり。彼方は、逸早く敏雄を見て進來るに、敏雄も走寄りて、秀子を奪去られし由を語り、

これより岩窟へ行く處なりと云ふに、貞明は眉を顰めていふやう、貞明は最う岩窟には居ないぜ、今此奴等の捕物に向つて、岩窟の中はすツかり、詮索したが、専六の影も形も無かつた。

敏雄は此處に至つて、全く手掛りを失ひしが、猶も屈せず、探索を遂げんと、貞明に別れて、それより山の麓に下り、日頃の鍛鍊を顯はして、隈なく八方を搜りしが、遂に一ツ手掛りを得て、支度を調へて三島へと出立し、其處にて専六が秀子を伴ひて西方へと行きたる事實を、確め、氣力を増して、嚴しく跡を追行ししが、専六も又巧に逃がれて先へくと、落延び、東海道を休む間もなく追ひつて、遂に再び大阪へと乗入りしが、此處にて又も専六の跡を見失ひたり。

敏雄は大阪に着くと、其まゝ、直ちに白井家の財産保管人の家に至り、専六が此地へ來たる事を告げて、彼が奸計に陥らぬやう注意せんとて、行きしに、此前財産を保管したりし人は二人ありしが、敏雄が嘗て面會したる人は、既に没し、今は殘る一人の大沼五郎といふが、獨り財産を預り居るにぞ、敏雄は急ぎ大沼方へ赴きたり。大沼は四十恰好の男にて、肥大としたるよき骨格なり、敏雄は座敷に通りて一禮し、

敏貴郎が大沼さんですか。大いかに私が大沼五郎です。敏外でもありません。貴郎が預つてお出の白井家の財産の事について、少し御談申したい事があつて参りました。白井家の事と聞いて大沼は驚きたる氣色なりしが、敏雄の方を屹と見て、大私は未だ貴郎を存じません。知らぬ人を信用する事は出来ませんから、貴郎が如何なる縁を以て白井家の事に係はる人か先づ其證據をお見せなさい。それではなくば其事についてはお話しはしません。敏それは私が此からお話申す事實で十分私を御信用なさる事が出来ます。大貴郎のお名前は「敏松井敏雄」大當時何をしてお出の敏秀子の身の爲を思つて盡力して居る者です。聞くより大沼は氣色を變へ、大貴郎は私に信用を置かせる證據を見せぬ以上は到底貴郎のお話は承はりません。よう御座るか巧く隠し込まうと思つても中々其手には乗りませんから、マア氣を付けてお話しなさるがよい。敏雄は始終目を配りて大沼の顔容様子に注意して居たりしが、日頃熱練したる眼力にて遂に此奴容易ならぬ悪者なりと見極めつゝ、敏私には貴郎に聞いて貰はうと思つて此處へは來ません。貴郎は是非とも聞かねばならぬのだ。大最うお話は爲ないからお歸りなさい。大沼は急に立上りて、恐ろしき目

を向けて此方に近づき、呑みもせば握出さん勢を示すに敏雄は動きもせず落付拂つて、敏お坐んなさい。貴郎は私の話す事を聞かねばならぬ。大沼は耳にも掛かず、目も瞞らし、大私は今貴郎にお歸りなさいと云ひましたらう。敏云つたが何うしました。大貴郎は歸りませんか。敏無論歸りません。大歸らなければ據無いから握出しますぞ。敏馬鹿な真似をなさるな。いふをも待たず大沼は飛掛りて、逞ましき手を差延べて敏雄の襟首を握まんとするを敏雄は早くも身をかはして大沼の手首を捕え、例の術にてぐつと力任せに締付けた。大沼は暫しも得堪へず、アツとばかり痛さに身を悶きて、目を白黒させて苦しむを敏雄は見すまして漸く手を緩め、敏お坐んなさい。坐つて尋常に話をお聞きなさい。と突飛ばせば、大沼はよろめきなながら後に手をつき、恐ろしげに敏雄を打見るのみ、敏サアお聞きなさるか。大いふ事があるなら早くお話しなさい。話して早く歸つて下さい。全拜貴郎は何しに來たのです。敏少し貴郎に聞きたい事が有つて來たのです。大そりやア何です。敏外でもない。昨日か今日あたり鳥尾専六といふ者が當家へ來たでしやう。大専六の身の上について貴郎は何を知つて居るので。敏貴郎は私の問ふ事に御答をなさらん。トいひ

つゝ鋭き目を向けて、大沼の素振を見れば、大沼は後に身を動かして懐に手を差入るゝにぞ、敏向をなさる。お待ちなさい短銃を出しても駄目です。私は貴郎より名入ですぞ。トいふかど見れば早穂持つたる我短銃を取出し、大沼の真向目がけて差付けた。大沼は慌たしく懐の物を押隠し、膝の上にて手を退きて左あらしめ、身を示したり。敏サア私を早く歸させやうと思ふなら私の問ふ事に真直に御返答をなさい。大沼ヨツ仕方がない承はりました。敏最う一度聞きませうが、鳥尾専六といふものが此方へ見へたでしやう。大沼そんな名前の男の舉動について私が何も知るべき譯はない。敏イヤ十分譯があります。大沼何んな譯が敏専六は自分の妻に白井家の遺産を譲受けさせやうと仕組んで居ます。大沼おれには正當の相続人があります。其人は外でもない勘彌の娘の秀子です。假令如何なる者が來やうとも、秀子が世に亡い人といふ借な證據が無い上は、餘人には決して渡されません。敏處が専六は其處に手ぬかりは無い。ちやんと立派な證據を持つて來やうとして居ります。大は、貴郎は何だぬ。其専六といふ男と共謀になつて秀子の財産を奪取らうと企んで居るのだぬ。敏けしからん。私は左様な者ではありません。今の處で専六が尤も恐れて居

るものは私です。私は何處までも秀子の爲を思ふものです。此上如何なる悪者が儘えて秀子の財産を覗はうとも、假令それが貴郎であるとも、私は十分秀子を保護して餘の者に指でも指さす事ではない。大沼は此語を聞いて益目を瞋らせたり。敏は冷笑ふ如く打見やりて、敏良し、貴郎が専六の事を云はなければ最う何も聞きません。然し一言云つて置く事がある。若し少しでも秀子の不爲になる事をする奴が有つたら此息の續く限り私は決して用捨はしない。宜しいか。トいひつゝ意味有り氣に睨付けて、やがて此家を立去れり。

表に出で、敏雄は心の中に、敏彼奴借かに悪黨だ。秀子の財産を横領しやうと企んで居るに違ひない。専六といひ此大沼といひ右から左から悪者共に見込まれる。は秀子も寔に不幸の人だ。然し己がついて居るからには、爪の垢ほども彼奴等の自由にさせるものか。今に見ろ。あつと云ふ目に遇はして呉れる。相手は手剛く出るだけ。仕事は面白いわ。ト思ひながら猶も彼か此かと、専六の行衛を突止める工夫を凝したり。

第十三回

大沼は敏雄が歸去りし後間もなく竊かに家を立出で、人目を避けて熊川町へと急
 行きたり。其頃此町は夏からぬ輩のみ住居を爲して、少し身分ある者は假にも足を
 踏入れぬ處なるが、大沼は漸く町の入口に着きて、稍半町ばかり迎來りし時、後より
 肩を叩く一人の男あり。大沼は誰かと振返りしが、大オ、鐵三か、今手前に遇はうと
 思つて來た處だ、鐵へ、何か又お役に立てやうと思つてかね、大何うだ、此頃の景氣
 は、越から何うも仕様がねえ、いふ目が出ねえで、燻り返つて居るのさ、大金は、鐵云ふ
 までもねえ、底を拂ひて仕舞つたのさ、大何うだ、一仕事やツて見る氣はないか、爲果
 せりやア、褒美は老ツかり爲るぜ、鐵ナ、褒美、そいつは耳よりだ、目方は、大勿論、ツ
 しり、鐵、こいつは好風が舞込んで來た、何でも遣りやしやう、仕事とは何です、大、此處
 ぢやア、話が出來ない、手前外に用はあるか、鐵、いつもの風順坊さ、何處へでも行きや
 しやう、大、夏し、それぢやア、北濱の丸金で待合はせて居るから、例の通り風俗を變へ
 て、成るべく早く遣つて來て呉れ、鐵、宜うがす、直ぐ跡から行きやしやう、二人は此に

て右と左に別れ、大沼は丸金といふ洋食店へと歩去れり。
 折しも敏雄は一個の商人と姿をやつし、假鬘附眉など例の熟練にて全く別人の顔
 立となりすまして、専六の探索の爲に恰も其時丸金へ行き、廣間の片隅なる一席の
 椅子を占めて、當時大繁昌とて絶間なく入込む大勢の客を、左あらぬ躰にて一々深
 く目を付けて居たり。斯くとは知らねば、大沼はやがて此處に入來り、敏雄に近き處
 に席を取りて椅子を引寄せしを、敏雄は早くも見咎めて、其どなく氣を付け居たる
 に、大沼は屹と大勢の客を一々見廻はし、敏雄をも見たりしが、例の巧なる化方に、其
 人とは心付かず、誰も知合の人の來て居ずと安心したる如く、暫く煙草をふかしな
 どして居たる折から、鐵三は立派なる紳士風に裝束ちて、揚々として此處へ入來れ
 り。大沼は其と見るより合圖の目配せして、差招くを、敏雄は見てはツと驚きたるも
 道理、鐵三は東京にて名代の悪者金の爲には如何なる罪も犯す男とて、探偵仲間
 は誰一人知らぬものなければ、此男と大沼が打合すは云ふまでもなく、惡圖に相違
 なし。大沼が工む事といへば、必定秀子の身上と、敏雄は鋭く二人の様子を詮索し初
 めしが、鐵三はやがて大沼と差向ひに腰掛け、額を近づけて話を初めたり。二人は始

終符調にて物語りしが敏雄は職務上とて悪者仲間の符調は何もかも知悉せば折々聞ゆる言葉は暗號ながら能く明解りて竊に話の模様を察するに何ぞ料らん二人は敏雄の事を話居たり大沼が仕事と云ひしは敏雄を暗殺する事にして首尾よく仕遂げなば百圓の褒美を與へんとの事なりやうく相談も終りしと見えて大沼は潜めたる聲を高め大己はこれから新聞へ廣告を出して明後日の晩此家で遇はうと云つて呼出すから手前は其時分來て居るがいかうそして己と話をして居る男を見たら其が今いふ男だから其積りでいかう宜しい引受けたいかう返事を待つてお出なせえと猶二言三言語合ひしがどつと酒酌交はして匆匆に出行けり敏雄は宿に歸りて翌朝二三の新聞を取寄せて見れば大沼は果して左の廣告を出したり

拙者が保管する財産の事に關し昨朝御來訪ありし御方に御相談申上度事有之
 明夜北濱の丸金方にて御待申候間同店迄御光來被下度候

大沼 五郎

敏雄はこれを見て冷笑ひたり憐むべし大沼は何も知らず容易く鐵三の手にかけ

させんと思ふべきが仔細を知る上は此方にも用意ありよし招くまゝに彼方へ行き見事鐵三をも打挫ぎ品によりては計の裏をかきて彼が望を打崩さんものと其日次の日は專六の搜索に暮しさて指定の夜となりしかば十分に身を固めて丸金へと赴きたり大沼は前より來りて待構へて居たりしがそれと見るより出迎へて頻りに好意ある躰を裝ひ此間會ひし折の無禮をひたすら詫入りたり敏イヤ其お詫には及びません今夜御相談の次第は何んな事ですか大餘の儀でも有りません此間お遇ひ申した時の御様子で見ますと貴郎は秀子の在處に付いて何か御存じのやうに見受けましたがお心當りの有る事でござりまするか敏いかにも有りますか大それを私に知らせては下さらんか十分の報酬は致しますから敏左様さ正當の手續を経てお知らせ申しましやう大正當の手續とは敏法庭で大そりやア何ういふ譯です敏其は斯うです私は貴郎が悪漢だといふ事を信じて居ります貴郎は秀子の財産を横領しやうと目論で居る然しお氣の毒ながら私が有るからには貴郎の儘にはさせては置きませんぞ見事鼻を折つて正當の持主を世に出して見せませう大口幅ツたい事を云ひなさるはいゝが用心をなさるがいゝ敏此方よりは其方

こそ用心をなさるがいに、トいひつゝ脇を見る真似して目早く他の席を見廻はせば、鐵三は近くの卓子の前の椅子に寄掛りて屹と此方を見詰め居たるに、敏雄は少しも曉らぬ躰にもてなして腹の中には竊に笑居たり。大貴郎は何うしても知らんといふのですか、敏左様さ。知らした處が悪圖の根を固めるやうなものですから益もない事です。やう。大。お氣をお付けなさい。貴郎の首は明日まで繋がつて居ないかも知れませぬぞ。敏折角のお言葉ですが無事に首を繋げて明日お目にかゝりましやう。大。ハ、ハ、盲目蛇物に恐ぢずとは能く云つたものだ。其廣言は後に承はりまじやう。兎も角御相談も破れた上は、モウ此上お話をする事もない。此でお別れ申しましやう。敏雄も外に口を開かず、やがて立別れて出行きしが、大沼は若し鐵三に合圖を爲すかと、鋭き目を放つて顔を見詰めしに、案の如く大沼は合圖の目配せしたり。敏雄はそれと心に點頭きて、一つの思案を定めて表に立出で、一町ばかり行過ぎて振返れば、鐵三は眼を追ふて忍びながら付來れり。

第十四回

敏雄は戦を好むにあらねど、別に深き謀ありて、見事企計の裏をかゝんものと、能く大沼の手に乗りて鐵三を誘出せしなり。されば丸金を出でてより賑はしき町筋へは行かず、成るべく人通少き道を過ぎて、時々それとなく振返り見れば、鐵三は跡より見へ隠れに付いて來れり。夜は次第に更けて人の往來は漸く絶え、殊に淋しき處をど撰んで行けば、果は全く人に遇はぬ片側町に出で、敏雄は又も振返り見しに、鐵三は何處へ隠れしか影もなし。さては彼奴廻り道をして、不意に向ふより出でんとするかと、心を配りて行く横町より、案の如く鐵三は現出でたり。それより後になり先に、稍暫く進行ししが、遂に人家を離れたる處に來り、敏雄は礎と歩を止めて屹と鐵三を見たるに、悟られしと思ひけん、鐵三は聲鋭く、鶴野郎待て、動くな。と叫立てしが、此方は少しも恐るゝ色なく、敏手前の企計は遂から知つてゐる。サア來いでか打たるべき、ひらりと身をかはして飛鳥の如く競掛りしが、忽ちにして一場の血戦となり、互に負けじと打合ふと、半時計、鐵三は遂に力盡きて、一足後へ退くよと見へしが、一目散に逃し出せり。敏雄は勝ち勝つたるものゝ、敵を取逃して目算外れ、

敏「チヨツ惜しい事をした。どうも逃がして仕舞つたか折角此處まで誑誘き出したのも、これでは何にも成りません。」ト獨り悔みて居たりしが、敏よし、それぢやア明日向へ行つて様子によつて一工夫して見やう。」ト宿に向ひて、格別急ぎもせず歸着き翌日何喰はぬ顔して大沼方へ行きたり。

大沼は敏雄の來りしを見て大に驚きしが、敏雄は態と莞爾々々と打笑みながら、敏「昨日の言葉通りチャンと首を繋いで來ました。」さては鐵三は仕損じたりしよと思ひしが、大沼は素知らぬ振して、大貴郎は何しにも出なすつた。敏「ナニ鐵三が昨夜の事を貴郎に何んな風に話しをするか見に來ましたのさ。」大「ナニ鐵三貴郎は何を御存じです。」敏「貴郎が鐵三に言付けて私を殺さうと掛かつたのを知つて居りますのさ。然しお氣の毒ながら反對に還付けてやりました。彼奴いづれ此家へ來まじやうが、首尾よい御報知は出來ますまい。」大「私は鐵三なんていふ男は存じません。生れてから未だ其様な男は見たりありません。」敏「處が今それ御覽なされるから不思議です。」此言葉の終ると同時に襖を開けて入來るは鐵三なり。敏雄が室に居るを見て驚きて身を退きしならんが、敏雄はすかさず、敏「此方へ還入るがよい。」大「貴郎は何を

なさる。主人の許しもなく知らぬ男を引入れていゝのですか。」敏「いくら白をお切りなすつても私は何も彼も知つて居ますからいけません。此から私と取組まうと思召すならしつかり腹帯を締めておかゝりなさい。」トいひつゝ襖の方へ立寄れば、鐵三は脇へ退きて通さんとするを、敏「鐵三己と一所に來い。少し手前に話がある。」敏「私はお前さんを知りやせん。知らぬえ人と一所に行く譯がねえ。敏「其譯を聞かして遣るから來るがよい。」大「行くな。」敏「餘計な口をお出しなさる。貴郎は先刻知らぬ男と云つたぢやアありませんか。」ト大沼を云込めつゝ、ザツと鐵三に近き直ちに兩の手首を引握みて例の一締を喰はしたるにぞ、鐵三はアツとばかりに身を悶えて、鐵行きますすゝ。行くから何卒放して下さい。」敏「よし尋常に來い。」いひつゝ先に立つて表へと立出づれば、鐵三は最早争ふ力もなく、素直に跡より従ひ行きたり。

敏雄は以前東京にて鐵三が專六と共謀して悪事を働きしを職務の關係より知居たれば、仲間の事として此地にて二人或は遇ひし事あるやも知れずと思ひ、鐵三が別に或罪を犯し此地に免がれ來りしをも能く知れば、此奴をしめてと顔を見たる時より心掛けしなり。やがて只有る料理屋に至り、一間の中に差向ひとなりて、敏雄は

威丈高に、敏三手前は己を知つて居るだらう。鐵昨夜始めて見掛け申したばかりでがす。誰方か未だ存じやせん。敏其前に見た事はないか。思出して見る。鐵何うも覺えが有りやせん。敏それぢやアいつて聞かせて遣らう。己は手前の跡をつけて、東京から来たものだぞ。

鐵三は悸として色を失ひたり。さては此人は其筋の探偵かど、身に覺えあれば大に恐れながら、鐵且那は何です。敏己は警視から来たものだ。鐵へ。最早逃るゝ處もなく、手足はわな／＼、探出すを敏雄は靜かに見て居たりしが、敏然し讀みと歌だ何うだ。鐵三己の爲に一つ働いて見る氣はないか。聞くより鐵三は満面に喜色を現はし、鐵何ぞ私に遣れど仰有るんですがすか。敏左様よ。鐵へ。何んな事ではがす。敏譯も無い仕事だ。首尾よく遣送けるなら、目こぼしを爲て逃がして遣らう。それでなけりやア直に細を掛けるばかりだ。鐵且那々々私に出来る事なら何でも致しやす。何うか此處ん所をお目こぼしをなすつて、敏手前がさういふ了簡なら見逃がして遣らないもんでもない。それぢやア己の注文を遣つて見るか。鐵何でも遣つて見やす。敏手前は專六といふ男を知つて居るだらう。鐵專六とは、敏大名專の事よ。鐵彼奴なら能

く知つて居やす。彼奴は此頃此地へ来て居やす。敏此頃遇つた事があるか。鐵二日ばかり前に平政の賭博で遇ひやした。敏何處に居るか知つてるか。鐵それは知りやせん。けれど探がしやア直に分りやす。敏それぢやア探がして呉れるか。鐵宜うがす。今日中に知らせて上げやしやう。敏それから手前今懐が淋しからう。鐵すつかり拂きゝりやした。敏手前に一儲け爲せてやらう。鐵儲けとは、敏大沼の手から金を貰うんだ。鐵何うして貰ひやす。敏手前百兩の褒美を貰う筈ぢやアねえか。鐵だが其りやア且那を殺付けたらといふ約束で、敏だから其で褒美をせしめるのだ。鐵冗談云つちやいけやせん。敏冗談ぢやアない。己のいふ事に従へば儘に百兩貰へる。鐵本當でがすか。敏嘘ぢやアない。チャンと己の胸に仕組がある。だから其より先に專六の在處を探がして來い。鐵此から直に行きやしやう。敏いゝか。約束を違へると手前は暗い所へ行かなけりやアならないぞ。さうすりやア素ッ首が飛ぶばかりだ。其氣で遣るが、いゝ。鐵且那の足をすくふやうな事は決してしやせん。私だつて自分の身は可愛うがす。二人はそれより手筈を定めやがて其家を立出で、右と左に袂を分ちたり。

敏雄は仕済ましたりと心竊かに喜びて宿に歸りて鐵三が便を待ちしが鐵三は蛇の道とて容易く專六の在處を見出し直に敏雄へ向けて一封の手紙を差出した。敏雄が其を受取りしは晝過なりしが專六は當時高麗橋詰の原田といふ家に同居して何か一仕事目論見居る由なりと認めて跡に道筋の繪圖を書きてよこせり。目論見とは問ふまでもなく秀子の事、棲處を突止むるからは最早此方のもので敏雄は直に高麗橋へと立出でたり。

第十五回

かくて原田の家に至り見るに表構は中々立派にていかにも身分よき人の住居と思はるゝ家作りなり。敏雄はつくづく様子を見済まし裏手に廻りて尙も中を見届けたるに折しも二階の小窓より何氣なく外を眺居るは見紛ふべくもあらず專六なるにぞ得たりと覺られぬやうに片蔭に身を隠し、それより近所の家に行きて原田が素姓を其となく聞合はせたるに、彼處の主は東京の人にて非常なる財産家の由折々故郷の客が來りて、一人二人は絶えず泊込み居るとの噂を聞き、專六茲に在

るからは、秀子も共に隠置くならんと、敏雄は其日より晝となく夜となく二日ばかり、此家につけて、專六が出行先々は何處までも影の如くに添ふて行き、少しの油断なく見張りせしが、遂に秀子の姿を見付けず、此上は家の中に入込みて搜索せんものと思ひしが、それにしては專六が留守の間に入込むが最も便よけれど、彼が行先を見逃がしてもならずと、先づ鐵三に言付けて專六を誘出させ、彼を一所に付置き、其跡に家内を捜さんものと、鐵三を呼寄せて其事をいへば、鐵三は早前に舊惡の急所を押えられたれば、一も二もなく直に承知し、何氣なく專六の家に行きて餘所に誘出したり。敏雄は其より弱々しき老人の風に姿を變へ、原田の家に行きて表より案内を乞ひたり。

内より出來りしは中年の男一人、様子にて察するに此家の主人らしきが、敏雄は一目見て心の中に驚きたり、此男は東京にて稻妻組といふ強盜の組合の仲間、綽名を金招牌の國と呼ばれ、彼處にて大罪を犯して身を隠せしが、さては此地に來りて東京の宮有と見せかけ、原田と偽名して忍び居たりしかど、忽ち胸に一計を設けて、敏雄の面前に居たのか、誰だ何處の者だ、敏雄は職務柄とて稻妻組の符關通

り言葉などは悉く知居れば同じ仲間の一人と見せかけて直に合圖の暗號を遣へば彼方も暗號の返事を爲し加ふる輩の例とて瞬く中に深き馴染の如くなれり。國何うして此地へ來たのだ敏ナニつまらぬ事をして危なく喰込む處をやらやう斬抜けて來たのだが此地にも張込があつて今ぢや被探索い身躰よ今貞ッていふ奴の處へ訪ねて行かうと思つて此家の前を通ると原田ッていふ名前が目に入つたので原田と云へば昔友達の疵熊といふ野郎が何でも其名前で此方へ來て立派に世間をくらまして居るつていふ事を聞いて居るから其ではぬえかと思つて様子を見に遣入つたのよするとお前が居たんで再吃驚さ國さんお前が此地に居るたア知らなかつたうまくやつて居るなマナな仕事でもあるか國ナニ己だつて身狀が悪くて此方へフクたのだ別に面白い日和ぬえよ敏お前今の商買は何だどうせ堅氣な事ぢやあるめえ國相變らず夜働きよ敏獨身で暮して居るのか下齒は無しか國今ぢやア娘ばかりだ外に專六ッていふ奴が同居して居る跡は手下の奴等が少し轉がツてるのよ敏お前娘を持つて居たかなア己らア些も聞かなかつたが此頃貸ツたんぢやアぬえか國ナニ一〇生の娘よ仲間は知らぬえが前から己には情

婦が有つたのよ其婦の腹に出來た娘だ此間まで東京に居たのを何だか顔が見たくなつて呼寄せて二三日前から家へ來て居るのよ敏お前も見掛によらぬえ中々色師だな其娘ッ子は今家に居るか國先刻一寸出掛けたいづれ其中に會はせやうよそれ其油給の女がそれだト壁に掛けたる額を指さすに敏雄は前に室へ入りし時其給は早くも見て知りたればさては其娘とは秀子の事だなしと思ひ敏して其專六ッて奴は何だ國大名專ッて矢張東京の奴よ何だか玉を連れて一仕事しに遣つて來たさうだが彼地から付けて來た探偵があるさうで餘熱をぬく爲に玉を何處へ隠して自分は己の處へ來て居るのだ敏甘え仕事なら半口乗せぬえかな國そいつは己もさう云つたが其ア困ると云つて尻込みして居る敏一番惡黨になつて玉を此方へ巻上げちやア何うだ國其も可愛さうだからな敏さうさなアお前其玉は何處に居るか知らぬえか國專は未だ明さぬえから分らぬえ何でも專の女房も此大阪に來て居るから其の處に隠してあると思ふんだ敏雄は斯くて秀子が此家に在らざるを確め國がいふ如く或は梅代の方に隠せしならんと其より話を他に轉じて暫く彼此と物語り爲て後近き内に又々訪ね來るべしとてやがて此處を立

去りたり。

敏雄は直に宿に歸り、尙此後の手段を考居たりしが、間もなく入來りしは鐵三なり。敏オ、鐵三か待つて居た、何うした、鐵三前さんの言付通り誘出しやしてから直に歸しちやばつが悪からうと思つて、平政の賭場へ行きやした、其處に彼此二時間も居やしたが、專は歸りかけやすから離れちやアならぬえと思つて一所に歸ると、途中で專は此から寄る處があるから別れると云出しやした、何處だか知らぬえが一所に行つていゝ處なら己も行うつて云ひやしたら、ナニ内所の家だと云つて別れて行つちまひやした、それから何處へ行くかと思つて見え隠れに付いて行きやすと、彼奴は大沼の家へ遁入りやした、こいつア前さんに知らせる好い種だと思ひやしたが、もうそちこちお歸んなさる時分だらうと急いで此家へ來て見やしたのさ、專は今まだ大沼に居やすぜ、敏專六は手前が大沼と近付だといふ事を知つてるか、鐵三つとも知りやせん、全體大沼は紳士とか云はれる身分だから、私見たいな破落漢と都合だなんて事を世間に知らしちやアよくぬえと思つて、自分もへち隠しに隠して居やすし、私にも堅く口止をして云はせやせんから、誰も知つてる奴は有

りやせん、敏少し考へた事があるから、大沼が若し手前に專六を知つてゐるかと思ひたら知らぬえと云へ、鐵三宜うがす、敏よし、サア鐵三、骨折賃に今夜手前に金儲をさせ遣る、鐵三、いづは有難え、何でがす、敏、それら此間大沼が己を殺したら百兩遣ると云つたらう、あれを今夜手前に貰はして遣るのだ、鐵三前さん此間も其様な事を云ひなすつたが、本當でがすか、敏、己が腔を云ふもんか、斯うするんだ、マア耳を借せ、ト傍に近付けて計を囁示せば、鐵三は聞終りて驚きたる如く、鐵三其様な事が出来やすか、敏、出来なくつてよ、手前がドチを組んで悟られなけりやア、屹度出来る、鐵三、私は百兩手に遣入るだから、決してマアな真似はしやせんが、何だか此アラまく行きさうもぬえ、鐵三大丈夫だ、安心して遣るが、鐵三、さう云ひなさりやア遣つて見やすとも、首尾よく行き、ア此様な有難え事はぬえ、敏、ちやア時刻を計つて大沼へ行け、鐵三、行きやすとも、トそれより二人は外に立出で、手筈を調へ、日の暮れるを待ちて鐵三は大沼へと急行きたり。

第十六回

折よく専六は既に歸りたる跡にて外に客も無く、鐵三は直に奥へと通されたり。鐵三は「旦那今日は戴く物が有つて來やした。大戴くものとは何だ。」鐵三は「百兩の金さ。大何だ。」「旦那、美の金さ。旦那の言付けた事を爲す遂せたら遣ると云なすつたらう。」大エツ、それぢやア敏雄を殺したのか。鐵三は「殺しやしした。」敏雄を殺したりと聞きて大沼は一時流石に慄どしたりしが、手剛き邪魔を除きたりと大に喜び、大嘘ぢやあるまいな。鐵三でがすよ、私一人ぢやア兎ても敵はぬえと思ひやしたから、相棒を一人頼んで其奴の家へ誑出して、二人して遂う〜鐵三殺して仕舞ひやした。サア百兩下せえ。大遣るよ、遣るけれども未だ手前の話ばかりぢやアラツかり渡されぬ。鐵三が「鐵三は鐵三が有りやす。大何んな證據が、敏雄の死骸さ。大エ、死骸、そりやア何處に有る。鐵三殺したまんま葛籠の中へ入れて、まだ相棒の家に置いてありやす。實は近所へ捨てれば直に足がつくだらうと思ふから、今夜あたり何處か遠くへ持出して、知れぬえ處へ捨て、來やうと思つて居やす。大ぢやア此から一所に行つて見せて呉れ、でなけりやアまだ安心しない。鐵三見せやすとも、其處で百兩はようがすか。大見てから引替に渡して遣る。」トヤがて傍の手箱より紙幣の束を取出し、大サア行かう。鐵三

りやしやう。
二人はそれより玉造の方を指して立出で、鐵三は先に立て導きつゝ、只有る淋しき町の古ぼけたる家の前に立止まり、獨り先づ中に入りて間もなく出來り、此方へと招くまゝに大沼は後に添ふて上がり込めば、主人らしき遅ましき男出迎へて、例の品物は彼處にと一間の中を指さし、又も鐵三に導かして三疊ばかりの怪しげなる部屋に入れり。鐵三、あの隅の葛籠の中に入れて有るんでがす。大早く蓋を開けて見せる。鐵三待ちなせえ。鐵三が仰して有りやすから、いひつゝ、鐵三取出して錠を開放し、蓋押除けて、鐵三御覽なせえ。煤ぶるりたるランプは今しも中を照掛けて見れば、著しく氣味悪き死骸一つ、疑ひもなく敏雄が亡き姿なり。大沼は一目見て直ちに其人と認めしが、同時に死人臭き匂の鼻を衝來るにぞ、大モウい、儘かに敏雄だ。早く蓋をしる。鐵三、うがすか。よけりや、美は何うか早くね。大よし遣るよ。其處で鐵三、モ一つ手前に頼みがあるんだが、此處で話をしたら餘所へ聞かれるやうな氣遣ひはないか。鐵三、内所の話なら此方へ出なせえ。い、部屋がありやす。ト又導きて其處を出で、主人に秘密の事なれば誰も來ぬやうにと頼みて、奥なる三方壁の一間に入

りたり。
 後見濟まして主人は竊と以前の三疊に這入り音せぬやうに葛籠を開けて小聲にて忍びやかに合圖をすれば死骸はパツチリ目を開きて打笑ひやがてヌツト立上りて葛籠を出で主人と低き聲にて囁合ひて兩人足音を忍びて大沼が居る部屋へと近寄り耳引立て、中の話を聞濟ませり。中には紙幣の勘定する如くなりしが、
 銀「確かに百兩ありやす有難え此で當分暖まれる」大又別に百兩遣るが、モ一ツ仕事を遣つて見る氣はねえか「銀エ又百兩といつは豪氣だ何んな仕事でがす」大「手前島尾專六ツて奴を知つて居るか」銀三は先程敏雄に言付けられたればぬかりなく素知らぬ振して、銀知りやせん」大さうか、ぢやアかい摘んで話をしやう、己の知つてる人に金持があつて、其人が死ぬ時に残る身代を殘らず娘に渡して呉れると遺言して、己とモ一一人の男に預けたと思へると其娘の在處と身分の證明を記した書物が失くなつたので娘が何處に居るか分らないから引渡す事が出来ないでまごついて居る中に、其一人の預人も彼世に行つてしまつて、今ぢやア己一人預り人に成つて居るのだ。銀「そいつはうめえ話した旦那の事だからすツかり着腹する積り

だらう」大「アさう云つたものよ處が先達から二三度其金持の姪に當るもの、亭主が來た。其奴が鳥尾專六といふ野郎さ何處で聞いて來やがツたか己の悪事の素姓をすツかり並べやがツてさういふ己の事だから何うせ手に入れた預金を娘に渡す氣はあるまい、親類の事だけれど黙つて目を瞑つて居て遣るから有金を山分けにしてよこせト斯ういやがツたのだ、己は一文でも誰にも渡す氣は無いから態と散々怒付けて、屹度娘に渡して遣ると云つた處が、專六は以前から娘を匂引して何處へか隠してあるから、此方の出様に依つては殺すとも生かすともすると云やがるのだ、娘が死んだ曉には外に親類も無い事だから、其財産は姪の處へ行く譯ださうすりやア自分が亭主だからうまくまじくなつて仕舞うなど、威しかけやがツたが、察して見るに彼奴娘を殺した日には死んだ證據を見せない上は金を受取れないから、其様な事で足が付いちや詰まらないと思ひ、それから娘を欺して自分を後見とか何といふ事に承知をさせて娘に金を受取らせてうまく巻上げやうと企んだ處が、娘が承知しないので斯ういふ談判に來たものだらうと、さう睨んだので己は態と強く出て取合はないやうに仕掛けて見た。銀面白うがすね、それから、大ト

云つた處で玉を向に握つて居られちやア始終ばつが悪いから、何うかして其娘を己の手に引上げて仕舞へば跡は己の勝手でも自由にして遣れるから、そのつまりが娘を此方へ渡して呉れるなら云ふ通りにしやうといつて欺して遣つた。それにしても眞實玉を握つて居るか何だか知れないから、一旦娘に會はした上でなけりやアいけないと云つたら會はせやうと云つたが、其に又箇條が付いて居るのだ。何んな箇條でがす。大彼奴は何にしても金を手に入れない前だから充分用心をしやがッて娘が何處に居るといふ事も、己が誰だといふ事も其家の奴等に知らしたくないといふ譯で、第一に途中は目隠しをして連れて行く事と、それから己は服装をすツかり變へて假鬘や附假面で顔も丸で別の人のやうにして行く事と、それから懐刀や短銃を呑んで来る事はならないといふのと、其上に時刻は夜更といふ事と、これだけ叶へればいつでも會はせるといふので、遂う明日の晩十時に京橋の橋詰で專六を待合はせる事にした。鐵それで旦那は行く積りですか。大其處だて、跡で考へて見りやア、こいつは悪くすると其様な風で己を連出して、手向ひの出來ないやうにして畏に嵌めるのだなと勘付いて、こりやア己が行つちや危

険いから姿を變へて來いといふのを幸ひ替玉を遣つて先の娘を見届けて貰はうと思つて、誰か度胸のいゝ男を考へたが手前より外に無い。何うだ百兩で一つ己の替玉に成つて行つて呉れないか。雖然しそいつは險難な譯です。ね。何んな目に會うか知れやせんぜ。大然し其時は替玉といふ事を知らして仕舞へばいゝ、相手が進へば向も仕様が無い話だ。鐵だけれどもこりやア直に御返事が出來ねえ。マア考へた上で明日旦那の家へ行つて極めやしやう。

外に立聞く兩人は話も最早終り近かければ覺られぬ中にと竊と引退り、敏雄は何處へか影を隠し、主人は素の居間に歸りて、素知らぬ顔して煙草をふかし居たり。間もなく大沼と鐵三は此方へ出來り、やがて大沼は主人に一寸挨拶して、獨り此家を出行きたり。跡に鐵三と主人は顔見合はせて微笑む折しも、敏雄も又其場へ入來れり。鐵三は行くやした。だが前さんの死んだ眞似は巧もんだね。私ア此迄探偵方が随分種々な人に化けたのを見たが、死人に化けたのは今夜初めて見た。鐵三前又金儲の藝が出來たぢやねえか。鐵三やア先刻大沼と話して居たのをモウも聞きなすつたか。然し彼の仕事は何だか氣味が悪いから何うしやうかと思つて居るの

さ「又百兩儲けさして遣らうか」鐵お前さん手傳つて下さるといふんですか「鐵さうよ。明日手前大沼の處へ行つて替玉になるッていふ事を承知して來い」鐵それから「鐵さうして手前は先へ行かなくッてもいい。己が又手前の替玉になつて專六の方へ行つて遣らう」鐵それぢやア私ア餘り虫が好すぎる。鐵何でもいゝから己に任かせろ。鐵さうして下さりや本當に有難え。

第十七回

敏雄は死したる人と思ひせて大沼の心をゆるさせ置き次に鐵三の替玉となりて專六の前に出で、首尾よく秀子を取返さんものと、姿を變へる事は素より得意の術なれば翌日は全く別人となり濟まして、其中に何處やら大沼に面差の似たる處あるやうに接へ、鐵三が來るを今や遅しと待ち受けしに夕暮に近き頃鐵三は入來れり。偶オヤ敏雄さんは居ぬえのか。敏此處に居る。己だよ。鐵エッ、こりやア何うも驚きやした。巧く化けるものでがすなア。私アすッかり外の人かと思つた。敏大沼へ行つて來たか。鐵行つて承知の返事をして來やした。成程其姿でも出なさりやア專六だつ

て誰だつて誑されやす。敏場所は京橋の袂だつたな。鐵さうでがす。敏よし、それぢやア手前此家に居て己の歸るのを待つてろ。鐵ようがす。敏雄はかくて定め時刻を待たひしが、やがて其時となりしかば、鐵三を跡に残して京橋へと立出でたり。橋に着きたる頃は恰も十時なりしが、待間程なく專六は向より歩來れり。專其處に居るのは大沼さんですか。敏雄は大沼の聲色を遣ひ、敏左様です。專お待遠でした。時に約束の事はすッかり守つてお出でなすッたらうね。敏勿論。專身の廻りに武器はありますまいな。敏何もありません。專先づ私にすッかり捜がさして下さい。敏お疑ひなさるか。專疑ふといふ譯ではないが、私は誑されるのは嫌です。敏宜しい。お捜しなさい。敏雄は手を廣げて專六に身の中を捜がさせたり。專六は注意深く懐中袂腰の廻りと、何處から何處までも残る方なく捜したれど、敏雄は身に寸鐵も帯びて居らざりき。專宜しい、サア行きませしやう。トそれより二人連立ちて一町ばかり先に行きしに、其處に一輛の馬車ありて待居たり。專サア此へお乗りなさい。敏雄は一寸御者の顔を見れば、姿を微服したれど正しく金招牌の國なるにぞ、悪黨のお揃ひだ。ト心に思ひつゝ、乗移れば、專六は用意の黒き巾を取出し、專約束通り目隠しをなさり。

敏「しましやうとも、サア目をお隠しなさい。顔を差出せば専六は憐れ巾もて目の上を蔽ひ、御者に合圖をすれば馬車は直に駈出したり。道は種々に折曲りて何處を通りしか分らぬやうにし二十分ばかり馳せて馬車は碓氷を止りたり。専六は着きました。敏では目隠しを取つて下さい。敏未だいけません。家の中へ這入つてから取りまじやう。ト手を導きて馬車を下り、庭の如き處を過ぎて家に入り、やがて一間の中に來りて、此處にて目隠しを解放したるに、目を開きて見れば小奇麗に裝飾したる座敷なり。専六は暫く此室に待つてお出なさい。直に秀子を連れて來ます。ト云捨て、専六は出行きたるにぞ、跡に敏雄は鋭き目を放つて四方を吟味せしが忽ち隔の襖の開きしに、素早く何氣なき軀を装ひて其方へ振返れば、専六は一人の美しき乙女を伴ひて、静々と此部家へ入來りしが、乙女はやがて敏雄の前に進出で、丁寧に辭義したり。専六は言葉の調子を改め、専六が兼てお話し申した秀子です。

敏雄はちつと乙女の顔を打眺めしが、専六の方に振向き、敏島尾さん、お目にかいた上はモウ宜しいから、直に歸りまじやう。専六に何かお聞きなされる事はありませんか。敏それは秀子さんを此方へお渡しになつた後にゆつくり聞きまじやう。



専六は押しても云はず再び乙女を伴ひて出で直に此座敷へ引返し來りて、又も敏雄の顔に目隠しをし、手を引きて家を立出でつゝ、前の馬車に乗りて京橋へと馳出せり。車中にては別にこれといふ物語もなく、やがて橋近くにて敏雄を下し、目隠しを取除けて共に橋の方へ進行ししが、専六は相手の素振に満足せざる如く、専六大沼さん、秀子を見せた上は確と約束を履行するでしやうね。敏否其は出來ません。聞くより専六は大に怒り、專六は人を弄物にするか。敏貴郎こそ人を弄物にするか。敏今夜見せた娘は偽物だ。専六はヒツクリとして屹と敏雄の方を見詰めたり。敏さうさ。隠してもモウだめだ。彼娘は金招牌の國の娘だ。私はよく知つて居る。それを秀子だなど云つて此方の目を晦まさうと掛つても、そんな事で容易に誑される私ぢやない。敏雄は此前金招牌の國の家にて娘の姿の油繪を見たりしかば、先程一目にて其人と知りたりしなり。専六は星を指されて言句も

出ず、敏雄は其顔を見て微笑みながら「モウ用も濟んだから此處でお別れ申さう。專見顯はされた上は仕方が無い。明日又貴郎の家へ行つて別に御相談をしましやう。敏今夜のやうな事なら御免を蒙る。專否、此度は決して此様な事はしません。敏では明日「專左様なら」ト立別れたり。されど敏雄は直には歸らず竊かに跡へと引返し、先程目隠しをされながらも通りたる道筋を充分深く注意して居たりしかば、馬車の速力を度りて曲りし路を一々曲りて、遂に彼の乙女に會ひたる家に到着し、其處にて稍暫く搜索を遂げしが、漸くにして家路へと急歸り、待居たる鐵三に有りし始末を語り、猶此後の計を教へて、明日は起きぬけに大沼へ行けと言付けたり。

第十八回

いはれたるまゝに鐵三は朝早く大沼方へ行きたり。大沼は直に出迎へて、大何うした。秀子に會つたか。會ひやせん。大はてね、何ういふ譯で會はなかつた。鐵專六め、人を誑さうと掛りやした。大何いふ風に誑掛けた。鐵三は敏雄に言合められたる通りに、昨夜の顛末を事細かに語れば、大面白いな、手前中々うまく遣つた。鐵且那は私の

云つた事をすつかり能く覚えて居なくつちやアいけやせんぜ。大何故、鐵專六に昨夜且那が行かなかつた事を見顯はされちやアならぬえから。大そりやアちやアんと心得てる處で、此から何うしやう。鐵斯うなせえ、專六が來て談判に掛つたら、よく考へて見て返事をする。と云つて、後に最う一度來て呉れると一先歸すが宜うが、其跡で私に其を話して下さりやア、共々御相談して何うにか決めやしやう。大其がい、では後に手前の家へ行くから待つてろ。鐵ようがす。鐵三はこれにて歸りしが、間もなく專六は訪來れり。大沼は北叟笑みて、大鳥尾さん、よく厚面ましくもお出なすつたね。專昨夜は實に何うも恐れ入つた。其お詫かた。又御相談に來ました。大又手をかえてお出なすつたか。兎ても誑さうとかいつても無益な事ですから、其氣で腹をしめて御相談なさい。國の娘を替玉にするなどは、餘り淺はかな手品ちやアありませんか。大貴郎は全躰何うして國の娘を御存じなのです。彼女は四五日前に大阪へ來たばかりで、誰にも未だ知られる譯は無いのです。が、貴郎はいつの間にも御覽なすつた。大憚りながら大沼です。何も彼もちやアんと知つて居ます。專其は何うでもいゝとして、あの秀子の事ですが……大一寸お待ちなさい。今度若し少し

でも偽があつたら、モウ御相談には乗りませんよ。宜しい今度は確實です。大それ
 ならサア承りまじやう。真間違なく眞實の秀子にお會はせ申さうと思つて、實は今
 日又参つた譯です。大何日「專今晚」大時刻は「專昨夜の通り」大屹度ですか。專屹度然し
 其代り此方に一つ請求があります。大何んな事です。專今夜こそ本物を出しますに
 付いては、先達お約束の手附として、金でも手形でも宜しいから彼の遺産の十分の
 一だけ持つてお出なさい。大さうすれば秀子を此方へお渡しなさるか。專渡しまし
 やう。大これは直には御返事は爲兼ねる。よく考へて見て後程御返事をしましやう。專
 「それでは後程又参りまじやうか。大さうです。晝過五時頃来て下さい。」
 專六はやがて後を約して辭し去りしに、大沼は直に鐵三の宿へと赴き、始終を話し
 て此後の處置を相談すれば、鐵三は一つは一つ手段を廻らせなければならぬ。私には
 今急な用が出来て網島まで行つて来なければなりやせんから、用をたして来てゆ
 ツくり御相談をしましやう。旦那は家へ歸つて待つて居て下さらぬか。私は大急
 ぎで網島から直に旦那の處へ行きやす。其途中ですツかり考へて置きまじやう。大
 「よし、それぢやア待つてゐるぜ。」と大沼は別れたり。鐵三は急ぎ鐵雄の宿に行き大沼が

話を洩らさず打明けければ、鐵雄は打明きて如此々々せよと教へたるに、鐵三は其意
 を得て直に大沼へと赴きたり。大沼は待兼ねたる様子にて、大何うした。い、考が出
 たか。鐵出やしたとも、すツかり方を書きやした。大何う爲るんだ。鐵先の望通りの金
 高の手形を持つて行くのさ。大そりやアいけない。己は直に打められる。鐵旦那は
 昨夜の通り行かなくツても宜うが、手前が又替玉になつて行くといふのか。鐵
 「左様さ。大手前の前だがそりやア餘程不安心だ。手前に大金を持たして遣つちやア、
 何處へ何う飛ぶか知れやしない。鐵其お氣遣ひは有りやせん。偽手形を拵へるのさ。
 專六が来た時に眞正の手形を出して見せて、私は偽手形を持つて行けば、鐵一杯
 嵌められるに違へぬ。大成程こりや巧い手前は中々軍師だ。ト尙もそれより相談
 を調へ、今晚又來べき由を告げて、鐵三はやがて立歸れり。」
 五時に至りて約したる如く專六は再び來り、專何うお極めなすツた御不承知です
 か。大沼は能と心を開きたる如くもてなして、大御請求通りに爲る事に極めました。
 今晚行く時に手形を持つて参りまじやう。專念の爲其手形を見る事が出来まじやうか。
 大「お見せ申しまじやう。專では直に願います。大沼はかねて用意したる眞正の手形

を幾枚か取出して見するに専六は手に取りて能く真偽を吟味して居たりしが突然正面の窓の外を見て、専私等はつけられて居る。大其様な事は有りはしない。専六の表に立つて居て頻りに此窓の中を窺いて居る奴は何だ。大沼は驚きて窓の方へ振向きて見る隙に、専六は素早く懐より鉛筆を取出し、手形の隅に小なる目印を付けたり。さては専六さかしくも偽手形を後に握まされん事を恐れ、かく一々目印をつけしと見えたるが、料らずも其計畧は大沼に見破られたり。そは外ならず窓に添ふたる壁に大なる委見の鏡が掛けて有りしかば、専六が爲し事は悉く映りたるにぞ、大沼は後を向きながらも素早く其を見付けたり。されど此方も左る者どて、聲をも立てず振返りもせず、能と心付かぬ躰にして外を見廻はし、専六が爲る儘に任置きて、大何だ誰も居やアしない。貴郎此方へ来て見て何の男だか教へて下さい。専六は逸早く仕事を終りて、づか／＼と窓際に立寄り、専オヤ居なくなつた。彼奴悟られたと気が付いて何處かへ隠れたのでしやう。大沼は心に笑へども顔にも出さず、大大方貴郎が見進へたのでしやう。時に手形は能く御覽なすつたか。専六に問違ひはありません。では今晚十時お待ち申して居ます。大宜しい。秀子と引替に此手形

を渡し申します。専六はやがて別を告げて立歸るを、大沼は送出つ、後影を見て冷笑ふて居たりしが、事は既に半ば成りし如く、首尾よく秀子を手に入れて、遺産を此方に巻上げんもの、心中喜ぶ事大方ならず、居間に歸りて一人微笑む處へ、鐵三は時刻を計りて來り。鐵三は鐵三は興がりて聞いて居たりしが、鐵三も中々ずるいが其より上手の物附れば、鐵三は興がりて聞いて居たりしが、鐵三も中々ずるいが其より上手の且那に會つちやア敵はねえ。うまくお遣なすつたね。時に偽手形は、大モウちやんと別に拵へて有る。これに専六が付けた通りの印を付ければ、いゝのだ。専六め馬鹿な奴だ。鐵三面白いな。ちやア直に付けやしやう。大沼はやがて偽手形を取出し、専六が前の手形に付けたる目印に合はして巧に同じやうに印し終りて、鐵三に渡せば、鐵三は受取りて懐中に收め、鐵三ちやア昨夜の通り行つて來やす。ト此處を立出で、又も敏雄の方へと赴きたり。敏雄は今夜爲すべき事の支度にと先程何處へか立出でしが、鐵三が來りし時は恰も歸合はして居たれば、様子を聞き計成りぬと喜び、偽手形を受納めて、昨夜の通りに委を變へ、十時少

し前に定め、の場所へと行きたり。

第十九回

其夜は専六が先に來りて待居りしが、それと見るより進來りて、専大沼さんですか。敏左様です。専お約束の手形は、敏持つて來ました。専念の爲一寸此處で見せて下さ。敏疑深いではありませんか。然しお望ならば見せまじやう。ト彼の手形を取出し、て示せば、専六は用意の忍角燈を取出し、蓋を開けて光を手形の上へ差向け、先程付置きし目印やあると、鋭き眼に探がして、一々有りしに間違ひなしと安心し、専宜しうござります。サア行きまじやう。ト連立ちて行けば、昨夜の如く馬車は待合はせて居たり。二人はやがて乗移りて、敏雄は前の如く目隠しをされしが、同時に馬車は一文字に駈出したり。敏雄は左あらぬ躰にて深く道筋に注意せしに、昨夜と同じ路々を折曲りて、同じ家の前にて車を止めたり。其より下立ちて前の如く導かれ、同じ座敷へと連行かれて、目隠の巾を取放されたり。専少しお待ちなさい。直に此處へ連れて來ます。敏暫く、其前に一言いふ事があります。今夜こそは手形まで持つて來たの

です。から、毛筋ほどの偽がましい事があつても承知しませんぞ。専大丈夫です。正銘の秀子を連れて來ます。ト立上りて、奥へと行きしが、暫くありて一人の乙女を伴ひて入來り、専お約束の白井秀子です。トいひつゝ、前に出して挨拶させたり。敏雄は一目見て、聲を立てぬばかりに喜びたり。今度こそは間違なく眞實の秀子、此迄爲したる骨折の甲斐ありて、此乙女を再び救出す時期は來れりと、跳る心を押沈めて居たりしが、斯くとは知らぬば、専六は屹と此方を見て、専最早此上は異存はありませぬ。敏育りませぬ。慥に秀子さんです。専サア約束通り直に手形の金をお渡しなさい。敏雄は態と落付拂ひ、敏急ぐには及ばない。追つて渡しまじやう。専けしからん。貴郎は此場になつて、其様な事を云いますか。敏左様さ。専六は奮然として、専秀子と引替に手形を渡すといふ約束を忘れたか。サア渡せ。今渡さなければ、只は置かんとぞ。敏ハ、ハ、さうおせきなさるな。貴郎は秀子さんが白井家の財産相續人だといふ事を證明する書付を隠持つて居るだらう。専六は驚きて、専それを何うして知つて居る。秀子は此時まで口を開かず、二人の様子を見て居たりしが、専モシ暫く、少し伺ひたい事がありますから、何卒私の申す事をお聞きなすつて下さい。敏仰有い

まし承まはりましやう。秀今私が或る財産の相続人のやうに承はりましたが其は
 寔ですか。敏左様です。秀子は専六に指さしして、秀として此人は私の身を引渡す爲
 に金をよこせと申すのですか。敏其通りです。秀それは私が相続する財産で拂ふ事
 が出来る位の金高ですか。専左様も秀子十分に出来る。ト専六は熱心にいへり。秀
 子は敏雄に向ひて、秀それならば何卒金を渡すやうにお取計らひなすつて下さい。
 いッそ財産を獲らず遣つて下さい。そして私を自由の身にして下さい。敏貴郎は無
 論自由の身となれます。此奴には一文でも遣るには及びません。トいひつゝ前に進
 むと見えしが手早く冠ぶりを假鬘を取放して付假面をも引剥し、ぐツと専六を睨
 付けて、敏専六己を知つてゐたらう。専六は倒れぬばかりに驚き、専ヤツ、敏雄か。敏さ
 うだ敏雄だ。サア今度こそは百年目だぞ。秀オ、敏雄さん御深切に又救ひに来て下
 すつたか。敏秀子さん、無御苦勞なすつたらう。然し御安心なさい。今度こそ専六を取
 つて押えます。専馬鹿をいへ、己の爲る事を見て驚くな。いふより早く足をあげて床
 を踏鳴らしたるに、それを合圖か。ドヤ〜と足音聞えて、忽ち黒頭巾に面を隠した
 る十二人の男が駆付け来れり。専ヤイ敏雄、生意氣に此處まで入込んで来やがつた

代には生かしちやア歸さないから覺悟をしる。敏雄は少しも騒がず、敏見事己を殺
 して見せるか。専己が一言此奴等に合圖をすれば、手前の命はモウ無いものだ。敏此
 人達は何だ。専己の手下だ。敏フウ、それぢや手下の人達に己が頼む事がある。専悪く
 落付拂ふな。手下に頼むなら痛くなく殺して呉れと願ふがい。其外の頼みなら兎
 ても聞入れはしない。十二人の者共は此時まで身動もせず、突立つたるまゝ合圖を
 待つものゝ如し。敏雄は其方へと近寄りて、敏頼みといふのは外でもない。専六を逃
 がさないやうに縛つて呉れ。専何をいふのだ。氣が違つたのか。此奴等は皆己の手下
 だぞ。敏雄は其言葉を耳にも掛けず、敏遣れ。ト一聲命令したり。黒頭巾の一人は直
 ちに突と専六の方へ進寄るにぞ、専六は驚きて身を退きながら、専こりや何うする
 のだ。ト云ふをも待たず彼方は飛掛つて引捕へ、男黒岩村の人殺しめ御用だ。神妙に
 しる。ト冠りし頭巾を脱捨てたり。此男は別人ならず、此敏雄が死せしと見せかけ
 て大沼を欺きし時力を合はせし彼古屋の主人なり。他の十一人は斯くとも見るより
 皆一同に頭巾を脱捨てばら〜と駆寄りて専六を取圍みたり。専六は手下の者と
 思の外皆々知らぬ顔の男なるに、専アツ、どう〜喰ひ込んだか。色は忽ち正蒼にな

りて慄出せり。
 此場の仔細は何ぞといふに、専六は兼てより床下の穴蔵に十二人の手下を隠置き、合圖と同時に此處へ駈付けさして、此迄さまぐの悪事を爲せり。敏雄は昨夜此家の搜索を爲してかゝる事を知得たれば、前に十二人の探偵仲間を頼置きて、今宵家の近傍に網を張らせ、手下の者が来るを待ちて悉く引捕えて縛上げ、手下の振して穴蔵へと入込ませしなり。専六は斯くとは夢にも知らねば、下には味方ありと安心して合圖をせしに、探偵等は直ちに入來りて今の如き次第となりしなり。専六は既に計の破れしを見て、隙もあらば逃出さんと企てしが、此方はいかにか取逃がすべし。遂に折重りて押付け、細を掛けて其筋へと引立行きたり。
 敏雄はかくて再び秀子を救出し、首尾よく我手に取戻せしかば、今は大沼を取つて、べめんものど翌日直ちに其家に行きたり。大沼は敏雄を見て幽霊が出來りしかど、大に驚きしが、此方は打笑ふて此迄の計畧を告げ、鐵三を手先に遣ひたりと云ふて、大沼の荒勝を取挫ぎ、此上は尋常に遺産を渡すか、さもなれば用捨はせじと嚴しく談判せしに、大沼も最早力及ばずと思切りしか、遺産を悉く引渡したり。秀子は敏雄

美人狩終

の盡力にて遂に世に出づるを得、二百萬圓の財産を受取りて幸福なる身分となれり。専六は其後法庭に引出され、其處にて黒岩村の人殺しは皆己の仕業なりと罪に服せしかば、やがて刑に處せられたり。梅代と伯母は身の悪事を知られて面目なしと思ひてや影を隠せり。
 敏雄はこれにて全く仕事を終へ、今は用なければ東京に歸らんとて秀子に別を告げしに、秀子は深く其恩を謝して、お貞にも會ふて厚く禮を述べたければ、共に東京へ進んできたまへとて、其より二人は東京に來りてお貞に會ひ、三人こゝに喜悅の眉を開きたり。その中にも秀子は深く敏雄の任侠に感じ、いつか命を掛けて慕寄れば、敏雄も又流石に憎からず、二人は遂にめでたく結婚して、睦まじく樂しき日を送れり。

(完)

櫻庭 小説むら竹

全部廿卷 合巻五册
大 凡 三千頁
美製 實價 四十五錢
逓 賃 廿 錢

全部目錄

- 第一集 玉籠窓の月 下宿屋 走馬燈
 第二集 深山木の納涼堂 藤椿 三筋町の
 第三集 水の流れ 義理の柵 誠譚 小説目
 第四集 雪の落 藤落 今年竹 藝が身
 第五集 毒の雪 下萌 藤落 今年竹 藝が身
 第六集 恩の雪 下萌 藤落 今年竹 藝が身
 第七集 垂水の 影法師 ムツカシヤ 軒の
 第八集 跡取息子の時 大坂の俳優 閑の
 第九集 行末の果 而中よ 俳優 閑の
 第十集 雨の舎り 兒の手柏 廻り車 多
 第十一集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第十二集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第十三集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第十四集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第十五集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第十六集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第十七集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第十八集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第十九集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十一集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十二集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十三集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十四集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十五集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十六集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十七集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十八集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第二十九集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多
 第三十集 常世の鏡 腹の子 廻り車 多

文學世界

全十二册

- 第一 紅葉命の安賣 全一册
 ○第二 山人作 全一册
 ○第三 妙山美 全一册
 ○第四 二堂作 全一册
 ○第五 櫛堂作 全一册
 ○第六 山人作 全一册
 ○第七 忍月作 全一册
 ○第八 居士作 全一册
 ○第九 正直作 全一册
 ○第十 大直作 全一册
 ○第十一 江見作 全一册
 ○第十二 水陸作 全一册
 ○第十三 松華作 全一册
 ○第十四 主人作 全一册
 ○第十五 金子作 全一册
 ○第十六 春夢作 全一册
 ○第十七 乙羽作 全一册
 ○第十八 主人作 全一册
 ○第十九 安田作 全一册
 ○第二十 露友作 全一册

紙製 彩色 紙製 彩色
 各一册 各一册
 切實 切實
 銀宛 銀宛
 稅八 稅八

紅葉山人著作第二版



實價廿五錢郵稅六錢

○紅葉山人著作 戀の病 全 近刊

○紅葉山人著作 三人妻 全二冊 實價五十錢 郵稅八錢

○紅葉山人著作 夏小袖 全 實價廿五錢 郵稅四錢

○紅葉山人著作 紅鹿子 全 實價十二錢 郵稅四錢

○紅葉山人著作 此ぬし 全 實價卅三錢 郵稅四錢

○紅葉山人著作 小説伽羅枕 全 實價三十錢 郵稅六錢

○紅葉山人著作 新色懺悔 全 實價十三錢 郵稅四錢

○紅葉山人著作 紙きぬ丸 全 實價二十錢 郵稅四錢

日本橋區四通目丁春日陽堂發行